

京都府埋蔵文化財情報

第 19 号

昭和60年度志高遺跡の発掘調査	山下 正・肥後 弘幸	1
千代川遺跡第10次の発掘調査	森下 衛・西岸 秀文	9
亀岡市篠町発見の宝篋印塔基礎	引原 茂治	13
—昭和60年度発掘調査略報—		18
13. 青野遺跡第9次	19. 山科本願寺跡	
14. 小金岐4号墳	20. 木津川河床遺跡	
15. 篠・黒岩作業場跡	21. 隼上り遺跡	
16. 篠・西長尾奥第2窯跡 群1号窯跡	22. 隼上り1号墳	
17. 篠・西前山窯跡	23. 木津遺跡第4次	
18. 長岡京跡右京第206次		
資料紹介 南金岐遺跡出土の記号文のある土器	田代 弘	38
長岡京跡調査だより		42
センターの動向		46
受贈図書一覧		48

1986年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



1. SD03検出状況 2. 出土遺物 3. 同・細部

昭和60年度志高遺跡の発掘調査

山下 正・肥後 弘幸

1. はじめに

志高遺跡は、京都府北部を流れる由良川の河口から約10km遡上した左岸の自然堤防上に立地する。調査は、由良川改修工事に伴うもので、昭和55年度から着手された。過去5年間の調査によって当遺跡は、縄文時代から明治時代に至るまでの遺構・遺物を包蔵する府下でも有数の複合遺跡であることが判明している。

今回の調査地は、京都府舞鶴市字志高小字舟戸に所在する。これまでの調査成果から調査地には、弥生時代・古墳時代の集落が広がること、また一部に由良川の旧河道が走ることなどが予想されたため、それらの検出・把握に主眼を置いた。

調査は、当調査研究センターが主体となり、昭和60年5月30日から昭和61年3月20日まで実施した。その間、舞鶴市教育委員会の吉岡博之氏には、直接現地でも度々懇切な御指導をいただいた。記して謝意を表する次第である。



第1図 調査地位置図 (1/25,000)

2. 検出遺構

今年度は、58・59年度の調査地の間にはさまれた位置に長さ80m・幅30mのトレンチを設定した。その結果、弥生時代中期、古墳時代前期・後期、奈良時代後半から平安時代初頭の各時期にわたる遺構とそれに伴う多量の遺物を検出した。また現地表下4m付近で縄文時代前期の包含層の存在も判明している。以下各時代ごとにその概要を記す。なお縄文時代の調査に関しては、今回は割愛する。

(1) 弥生時代の遺構

現地表下2.3m付近で検出し、竪穴式住居跡・土塚・溝・旧河道がある。

竪穴式住居跡(住居11~14)は、平面形が円形を呈するもので、4基検出した。いずれも住居内中央部に、1.0~1.5m程の円形あるいは楕円形を呈する土塚をもち、住居13をのぞき土塚内には炭がたまる。その周囲に焼土が見られるものもあり、炉等の施設が考えられる。住居跡の規模は、径6.0~7.0m・壁の立ち上がり約0.3~0.4mを測る。住居内からは、弥生土器のほかに管玉(及びその未製品)、砥石・石錐・石鏃等の石製品・石器類が出土した。

土塚5は、長方形を呈し1.5m×2.0mの規模をもつ。土塚内から多量の弥生土器がつまった状態で出土した。土塚6・7からも弥生土器がまとまって出土している。

溝2は、弥生土器を多数含む溝であるが、住居跡等の他の弥生時代の遺構と埋土を異にする。層位から判断してそれらに先行するものであるが、部分的にしか検出できなかった。溝3は、調査地の西側で検出した溝と思われる落ち込みで、片側の肩部のみの検出に終わった。住居14を削り、さらに旧河道に流入するが、その全体の形・性格は不明である。

これらの遺構は、出土遺物から弥生時代中期に属するものである。

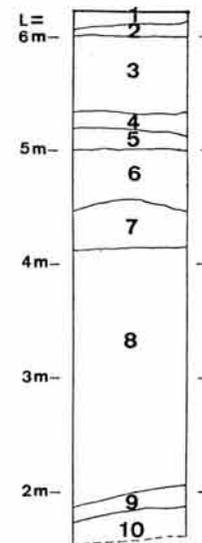
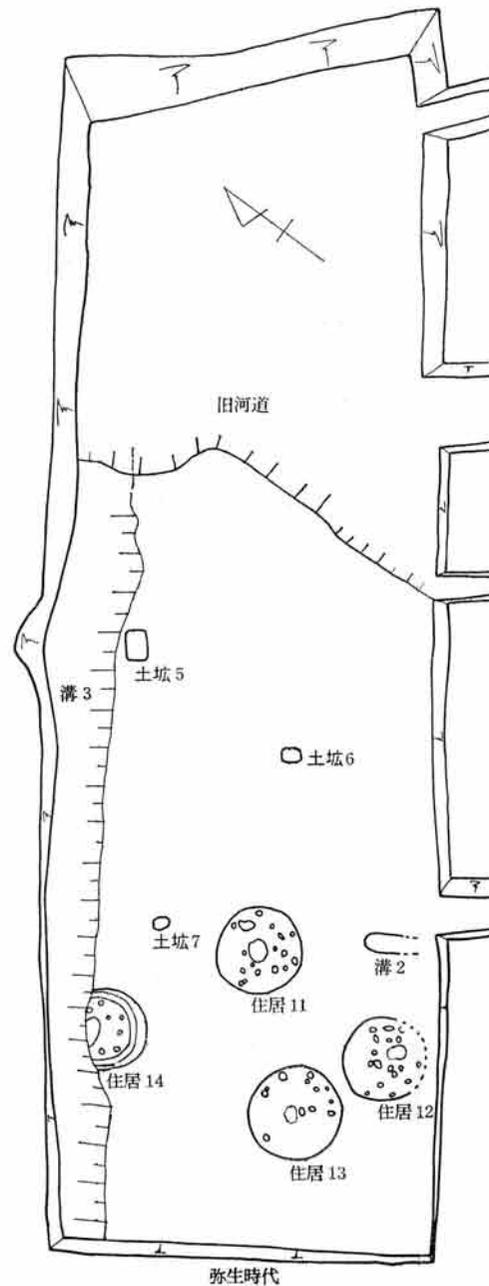
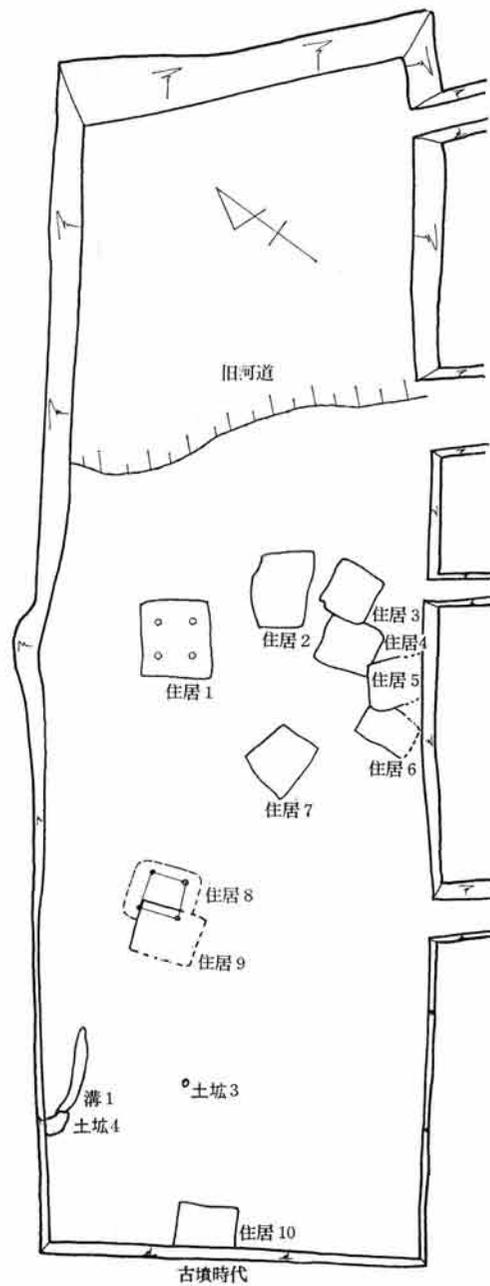
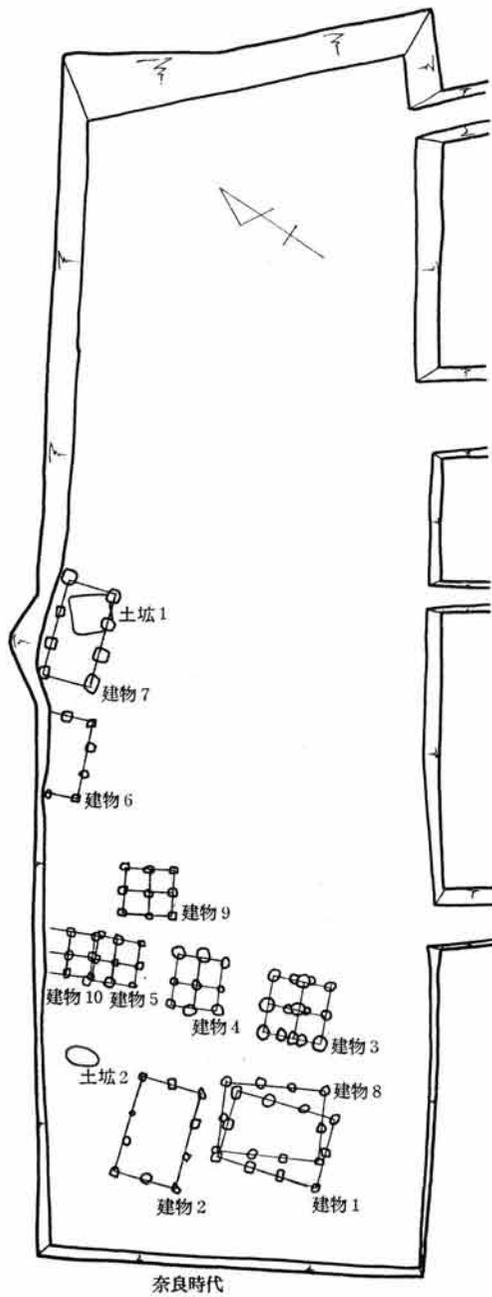
旧河道は、調査地の北東部全域を占める。川岸の片側の肩部のみ検出した。埋土の堆積を見ると、河川の肩部に沿ってまず弥生時代中期の包含層が流入・堆積しており、さらに砂層—古墳時代前期包含層—砂層の順で堆積していた。埋まり方から判断して、この旧河道の流れは、①弥生時代中期から古墳時代前期の間と②古墳時代前期以降の2つの時期に少なくとも分けることができる。旧河道の埋土の最上層の遺物やそれ以降の遺構の形成過程等から判断して、この旧河道は古墳時代前期後半には埋まっていたものと思われる。

(2) 古墳時代の遺構

現地表下2.0m付近で検出。旧河道(既述)・溝・竪穴式住居跡・土塚がある。

溝1は、土塚2によってその一部が削られているためその形がはっきりしないが、L字状に曲がるものと思われる。溝内からは、古墳時代前期の遺物が多数出土した。

竪穴式住居跡(住居1~10)は、計10基検出した。すべて方形を呈し、一辺約3.5~5.6m



- 土層柱状図
1. 盛土
 2. 近世包含層
 3. 中世包含層
 4. 平安時代包含層
 5. 奈良時代～平安時代
初頭包含層
 6. 古墳時代包含層
 7. 弥生時代中期～後期
包含層
 8. 無遺物層
 - 9, 10. 縄文時代前期
包含層



第2図 遺構変遷図

と比較的小さい。住居跡内には焼土・炭の広がり認められ、カマド等の施設が考えられる。住居跡内から出土した遺物が少ないため、時期比定が困難であるが、住居1・3・8～10は出土遺物等から古墳時代後期に属するものと思われる。

土塚1・2からは、古墳時代後期の遺物が出土した。

(3) 奈良時代の遺構

現地地表下1.5～1.7m付近で検出した。掘立柱建物跡・土塚から構成され、建物の方位・柱穴の切り合い関係・出土遺物から2つの時期にわけることができる。

第1期の遺構は、建物1～7・土塚1である。建物1・2は、2間×3間の同規模の建物で、その脇に2間×2間の総柱の倉庫3棟(建物3・4・5)が並ぶ。さらに少し離れて建物6・7、土塚1がある。土塚1は、建物7の真下にあり、一辺約3mの方形土塚の中に須恵器杯・蓋のセットが供えられていた。

第2期の遺構は、建物8～10・土塚2である。建物8は、2間×3間の建物で、第1期の建物1付近にわずかにその棟の方位を西にずらして建てられていた。建物9・10も同様の方位を持つことから、第2期に属するものと考えた。

これらの掘立柱建物跡群は、柱穴の掘形が0.5～1.0m・柱間寸法1.6～3.6mと極めて大規模なもので、建物の形態や規模が統一されている。出土遺物・建物跡群の配置・構成から判断して、奈良時代後半から平安時代初頭にかけて、数回の建て替えを行いながら存在したと思われる。

(山下 正=当センター調査課調査員)

3. 出土遺物

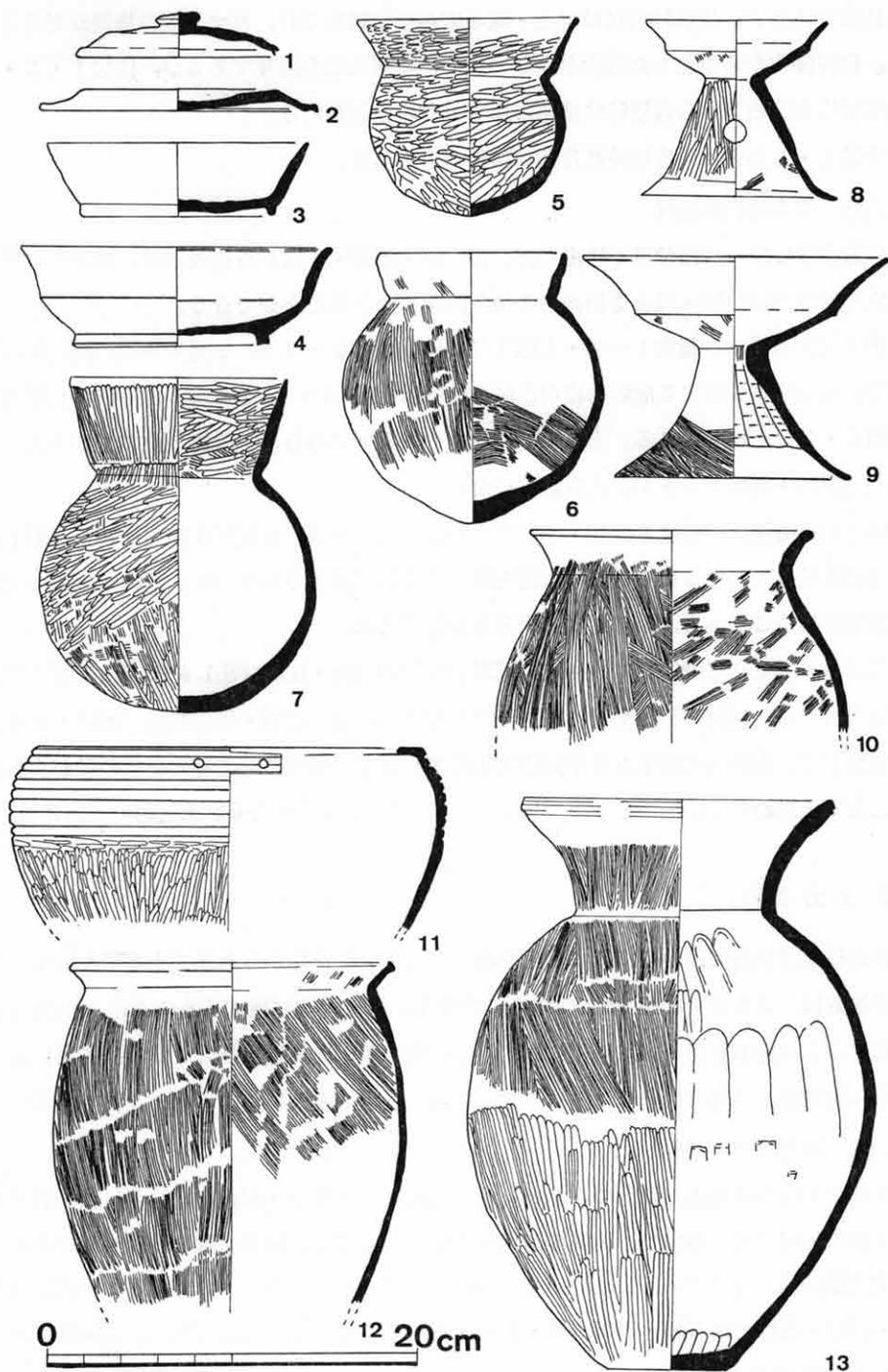
各遺構及び包含層内から多量に出土した。またトレンチ外からも縄文土器等を採集した。その総数は、コンテナ約250箱にのぼる。内訳は、縄文時代に属するもの5箱、弥生時代に属するもの約170箱、古墳時代に属するもの約40箱、奈良時代から平安時代初頭に属するもの約20箱、平安時代後半に属するもの5箱、近世・近代に属するもの5箱である。

(1) 縄文時代の遺物

トレンチ内から出土したものとトレンチ外で採集したものがある。前者には、磨消縄文土器片・切目石錘があり、後期の産物である。後者には、縄文土器・石器・骨片がある。縄文土器には、爪形文・条痕文等がみられ、北白川下層式を含む一群である。石器には石鏃・石匙・石錐・礫石錘・磨製石斧・磨石・石皿がある。特に石鏃は30点以上採集した。後者のものは前期の産物である。

(2) 弥生時代の遺物(第3図11～13)

弥生土器・石器・石製品等がある。弥生土器は、今回の調査で最も多く出土した遺物で



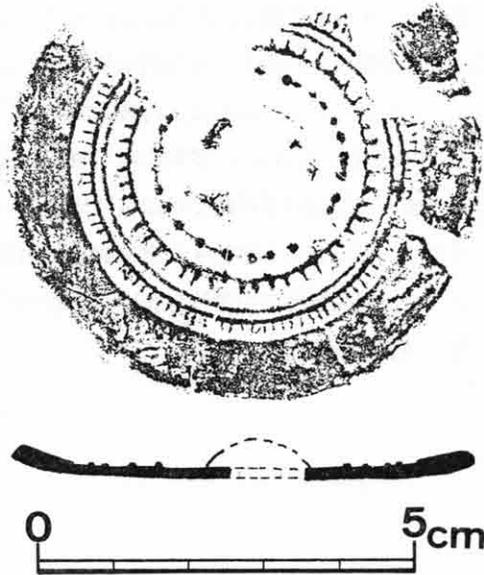
第3図 出土遺物(1)

1: 奈良時代土塚 2~4: 土塚1 5~10: 旧河道包含層 11: 土塚6 12: 住居11 13: 溝2
 1~4: 須恵器 5~10: 土師器 11~13: 弥生土器

その大半は中期のものである。壺(11・13)、甕(12)、高杯、鉢等の各器種がある。壺・甕には、赤褐色のやや粗い胎土からなる在地系の土器群が大半を占めるが、大型の壺の中にはかなりの割合で搬入品が見られる。またミニチュア土器のほか、把手付きの壺・鉢も目立つ。石器には、石鏃・石錐・打製石斧・磨製石斧・撝き石・磨石・砥石・石皿等がある。特に磨製石斧が多く、30余点を数える。太型蛤刃石斧・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧・環状石斧と各種揃っており、中には非常に小型のものまである。砥石も多量に出土しており、100点近くにもおよぶ。大きさも様々で指頭大のものから人頭大のものまである。打製石斧は、刃先の磨耗が著しいものがあり、耕作具として用いられたのかもしれない。石皿は住居跡内からの出土が多い。石製品には、管玉・石剣がある。管玉はすべて碧玉製で、住居跡内、包含層から30点近く出土した。住居12内及びそのすぐ横から出土したものは、23点を数え、長さ5~10mm・径2mmを測る小さなものである。また住居14では、その未製品と原石が出土した。石剣は、銅剣形・鉄剣形の両者が出土した。

(3) 古墳時代の遺物(第3図5~10)

土師器・須恵器・銅鏡がある。土師器には、旧河道出土の須恵器を共伴しない時期の土器が多量にある。旧河道の岸部には、幾層かの層が形成されており、土器群もその層ごとに一定の傾向を示す。下層の土器群は、布留式甕と二重口縁の壺を含む土器群で、上層の土器群は、口縁部に輪積みの痕跡を残す壺・甕と口縁部の内湾化の進んだ布留式甕を含む土器群である。これらの土器群は、いずれも完形の土器を多く含む良好な資料である。土師器にはこのほかに土坑4・住居10から出土したものとして、大きく外反する口縁部をもち、その内面が強いナデによって波状を呈する甕がある。この甕と共伴する時期の須恵器が少量ある。銅鏡(第4図)は、面径6.0cmを測る小型の仿製鏡で古墳時代の包含層から出土した。鏡背の文様構成は、外側から幅広の平縁—櫛歯文—二重の圈線—変形鋸歯文—圈線によって繋がれた珠文—鈕の順である。この鏡に比較的似たものとして、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて畿内・瀬戸内海沿岸を中心に分布する重圈文鏡があげられる。



第4図 出土遺物(2)

(4) 奈良時代後半から平安時代初頭の遺物(第3図1~4)

土師器・須恵器がある。土師器には杯・皿・甕・鍋がある。杯・皿には高台を付すものと付さないものがあり、その位置も杯・皿の底部のやや内側と端部とに分けることができる。また丹の塗られた杯・皿もみられる。須恵器には杯・皿・蓋・高杯・甕等がある。土師器同様、杯・皿は、高台の有無の別がみられる。蓋には天井部がゆるやかに斜め下方にのびるもの、扁平でつまみを持つものと持たないもの、輪状のつまみを持つものがある。

その他、各時代の遺物があるが今回は割愛する。多量の遺物があるが、整理しはじめたばかりなので、詳細については後日に報告したい。

4. ま と め

(1) 奈良時代の掘立柱建物跡群は、住居5棟・倉庫5棟・土壇からなり、その構成から2期にわけることができる。建物の整然とした配置、規模の大きさ・統一性から、一般の集落とは性格の違ったものと思われる。

(2) 弥生・古墳時代の竪穴式住居跡は、計14基検出した。これまでのカキ安地区で発見された集落跡の北東への広がりを確認できた。また、この集落の南西には大溝、北東には旧河道が存在したことがわかった。弥生時代中期においてはこの大溝から河道の間に生活空間があり、大溝以南には墓域が広がることを再確認できた。

(3) 旧河道の川岸で確認できた古墳時代前期の多量の遺物は器種も豊富で完形のものが多く、この時期の当地域における土器の編年を進める上で、貴重な資料である。

(4) 石剣・玉及び鏡の出土は、志高遺跡の性格や周辺の歴史的な背景を考える上で、非常に貴重な資料と言える。また碧玉製管玉の原石・未製品の出土から、この集落でも玉作りをしていることがうかがえ、丹後地域の弥生集落での玉作りの例を増やすことになった。

(5) 由良川下流域には、多数の縄文時代の遺跡が自然堤防上を中心に分布しており、桑飼下遺跡・三河宮の下遺跡では縄文時代後期の住居跡等が確認されている。縄文時代前期の遺物は、三河宮の下遺跡・八雲遺跡等で知られているものの、遺構は現在まで発見されていない。志高遺跡での遺物包含層の状態から考えて、遺構が検出できる可能性が高く、今後の調査に期待したい。

(肥後 弘幸=当センター調査課調査員)

千代川遺跡第10次の発掘調査

森下 衛・西岸 秀文

1. はじめに

千代川遺跡は、過去9次にわたる発掘調査が行われている。その成果によると、遺跡の範囲が亀岡市千代川町一帯に広がる扇状地上のほぼ全域にわたること、弥生時代～鎌倉時代の長期間営まれた大集落遺跡であることなどが判明している。またその北半部には、丹波国府推定地や桑寺廃寺なども重複しており、府下有数の大複合遺跡であると言える。

今回の発掘調査は、ここ数年来継続して実施している国道9号バイパス建設に伴う調査の1つとして行ったものである。

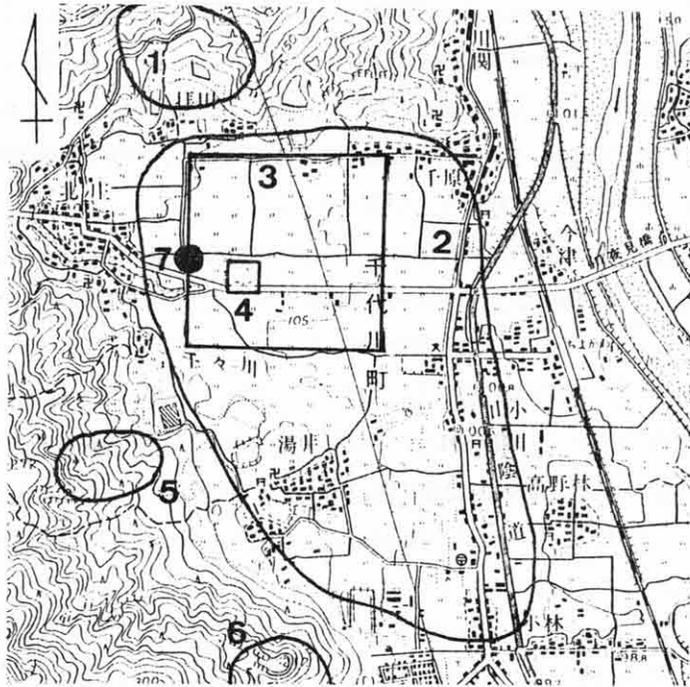
当該地を含む国道9号バイパス予定路線は、本遺跡を南北に縦断するばかりでなく、推定国府域の西辺部上を通過するように計画されている。そのため昨年度には、国府推定域を中心とし約40,000m²にわたって試掘調査を実施した(第9次調査)。その結果、国府跡に

関連すると考えられる奈良～平安時代の遺構・遺物をはじめ、弥生時代後期～鎌倉時代の多岐にわたるものが検出された。

今年度以降、その成果に基づき本格的な調査を進めることになったわけである。

2. 調査の概要

本年度は、まず全対象地域の南端部である府道と予定路線の交差部分から、北へ約100m(6,000m²)



第1図 調査地位置図(1/25,000)

1. 拜田古墳群
2. 千代川遺跡
3. 丹波国府推定地
4. 桑寺廃寺
5. 北ノ庄古墳群
6. 小金岐古墳群
7. 今回の調査地

を対象として実施した。調査地は亀岡市千代川町桑寺に所在し、北西から南東に向かってゆるやかな傾斜をなす。

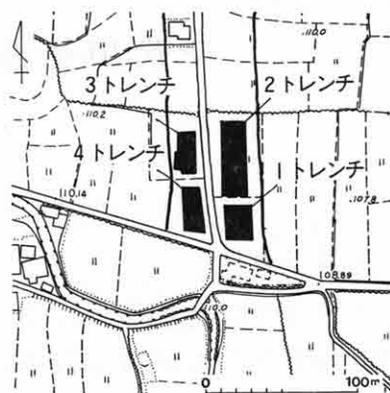
調査は対象地内に4か所のトレンチを入れ、約1,800m²を掘削して行った。期間は、昭和60年8月28日～昭和61年1月14日までを要した。

主な検出遺構(第3図) 今回の発掘調査で検出した遺構には、竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・溝・土壇・井戸などがある。それらは、弥生時代後期・古墳時代後期・奈良～平安時代・鎌倉時代のものに大別される。以下、時代順に主なものについて記述する。

弥生時代の遺構としては、竪穴式住居跡SH0302、溝SD0201・SD0202・SD0301がある。また出土遺物が少なく確証を欠くが、埋土の状況などから土壇SK0104～SK0110、SK0203～SK0210、SK0304～SK0306、SK0309～SK0311もこの時期のものとして判断した。SH0302は、5.3m×4.6mの隅丸方形を呈し、深さ約25cmを測る。床面には、その四周に幅5～10cmの壁溝を設け、南東側の壁から中央にかけて特異な形態の区画をもつ。その北側にはSD0301がある。幅4m以上・深さ約1.5mを測る大溝で、西から東へ向かって蛇行して流れるものである。当時の集落は、おそらくSH0302を東端とし、北をSD0301に画された状態で、調査区の西側へ広がっていたのであろう。その他、SD0201は幅約1m・深さ約30cmを測り、弥生土器が比較的まとまって出土した。

古墳時代後期の遺構は少なく、溝SD0403を検出したにすぎない。平安時代頃に機能していた溝SD0402とほぼ同一地点に重なっており、一部蛇行していた部分を確認しえたにとどまる。幅約2m・深さ約20cmを測る浅いものである。

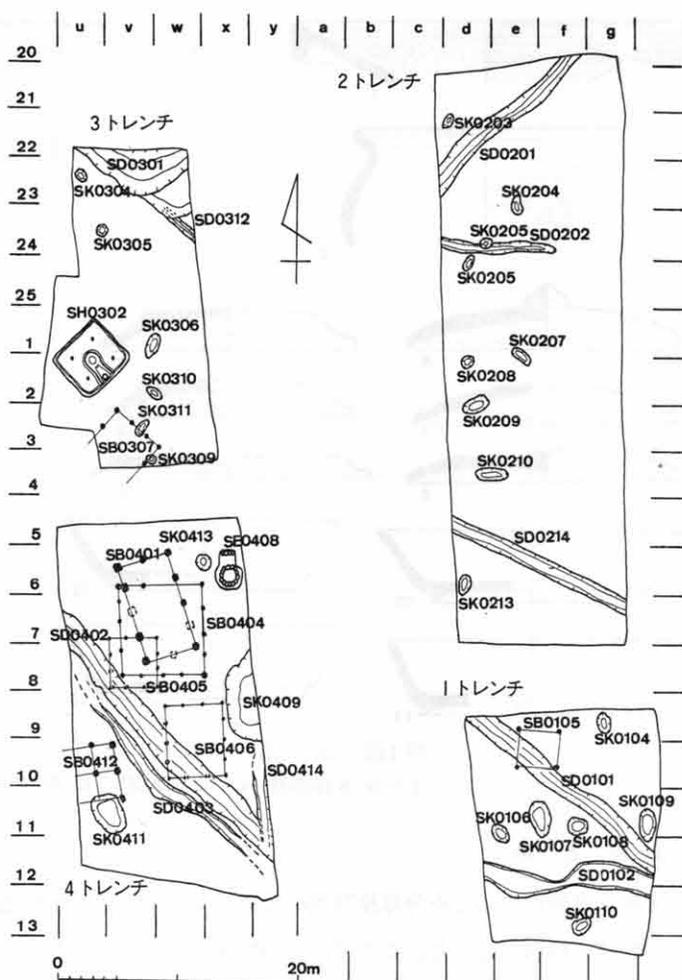
奈良～平安時代の遺構としては、掘立柱建物跡SB0401・SB0412、溝SD0101・SD0102・SD0402がある。SB0401は、2間(4.6m)×4間(7.7m)の規模をもち、主軸を真北から西へ約18°振る。またSB0412は2間(4.6m)×1間(2.3m)以上の規模をもち、主軸を真北から西へ約10°振る。いずれも国府推定域と想定される地域外で検出したものではあるが、たがいに主軸の方向は異なっており、国府にかかわると考えられている地割の方向ともずれている。溝においてはさらに顕著にみられ、東西方向に蛇行するSD0102、北西から南東方向へ流れるSD0101・SD0402など、国府推定域の内外にかかわらず旧地形に沿うものであった。つまり、国府が当地に置かれ、それに伴う周辺施設の整備が行われたという痕跡を今回の調査では確認できなかったわけである。



第2図 トレンチ配置図

鎌倉時代(13世紀)を中心とする中世の遺構としては、掘立柱建物跡SB0404～SB0406、井戸SE0408、土壇SK0409・SK0411・SK0413、溝SD0414などがある。またこのほかにも数多くの柱穴を検出しており、整理作業が進めばさらに建物跡を復元しようと考えている。

これらは、4間(7.2m)×4間(7.6m)の規模をもつSB0404をはじめ、3間×4間のSB0405・SB0406などで構成される当時の集落の一面を検出したものである。特にSB0404とSB0405が重なって

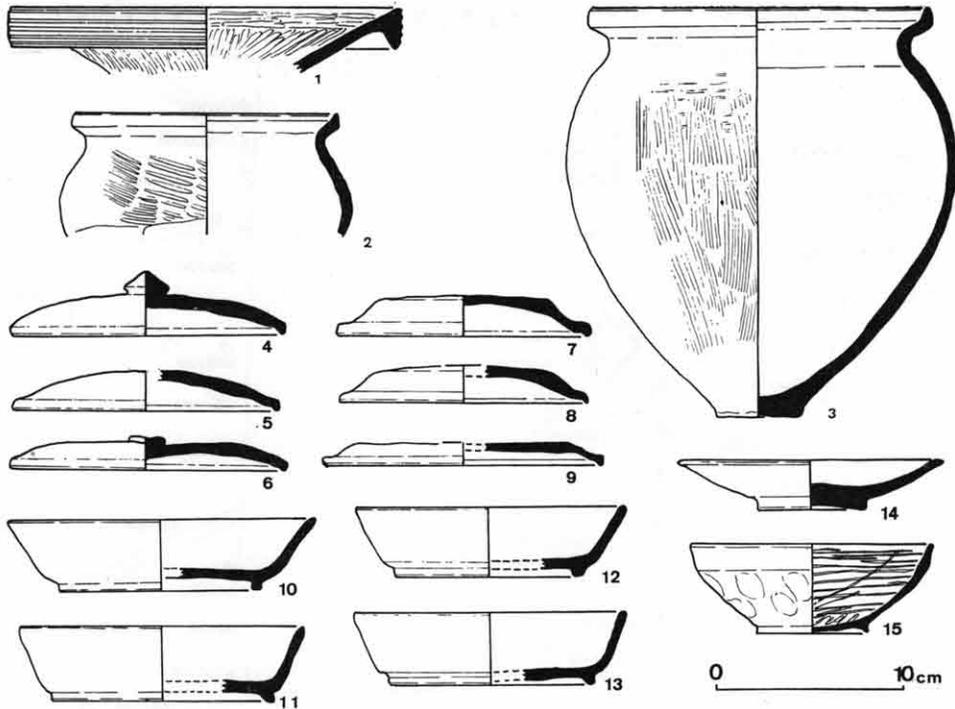


第3図 主要遺構配置図

るように幾度かの建て替えが行われたようで、単一時期のものではないことも確認できる。その一面にあるSE0408は、石組の井戸で、北側に張り出し部が設けられている。

その他、時期が明らかでない遺構も多くある。今後の検討課題である。

出土遺物(第4図) 今回の調査では、整理箱約60箱に及ぶ多量の遺物が出土した。その内容は、上記の遺構の示す4時期のものが中心である。中でもSD0402出土の遺物は、8世紀～10世紀という時期幅は認められるものの、多量に出土した。須恵器杯身・杯蓋が主流を占め、墨書土器1点(判読不能)、緑釉陶器3点、灰釉陶器1点などもみられた。また弥生時代後期の土器は、SH0302やSD0201から一括性の高いものが得られた。ほかに3トレンチの遺物包含層などから縄文時代後期と考えられる土器片が数点出土した。



第4図 出土遺物実測図
1~3 SH0302 4~14 SD0402 15 SE0408

3. ま と め

遺構・遺物について十分な検討は行えていないが、以下現時点までに把握できた調査成果の概略を簡単に記した。ここではその内容及び問題点を要約し、まとめとする。

① 3 トレンチからその西方にかけ、弥生時代後期の集落跡が営まれていたであろうと考えられた。それに対し、1・2 トレンチから検出した多くの土坑は、当時の墳墓と位置づけできるかも知れない。

② 奈良～平安時代の遺構・遺物は、当該地に比定される国府推定域西辺部とかかわる施設を示すものとは考えられなかった。また、それらから国府周辺施設の整備という点も看取することはできなかった。しかし、今回の調査は広範囲な国府推定域の中ではごく一部のことであり、早々に千代川国府説に否定的な判断を下すことは避けるべきで、さらに周辺地区での調査成果を踏まえ十分な検討を行う必要がある。

③ 中世の集落遺構の検出は、亀岡市では北金岐遺跡に次いで2例目である。建物跡やその他関連遺構の配置など、充分検討しその様相を把握することに努めたい。

④ その他、古墳時代や縄文時代後期の遺構・遺物もみられる。今後の調査に期待したい。

(森下 衛・西岸秀文=当センター調査課調査員)

亀岡市篠町発見の宝篋印塔基礎

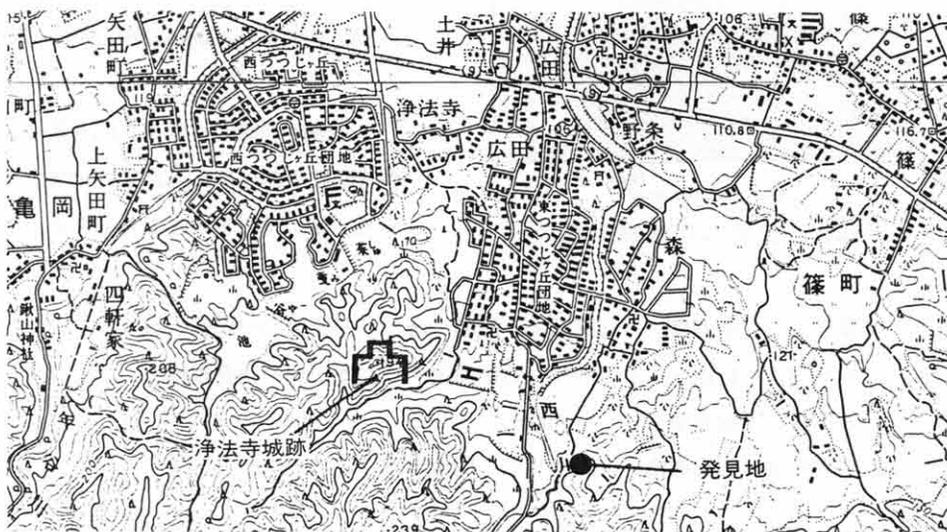
引 原 茂 治

1. はじめに

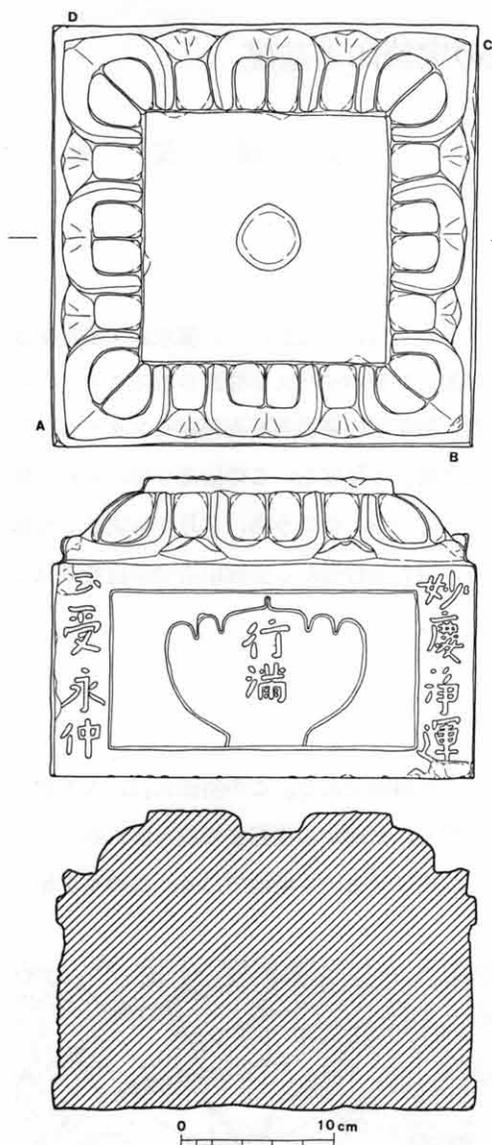
亀岡市南東部の篠町の丘陵地には、8世紀後半から11世紀にかけて、須恵器・緑釉陶器などを生産した篠窯跡群がある。この丘陵地に国道9号バイパスが建設されることとなり、昭和51年度から55年度まで京都府教育委員会が、56年度以降は当調査研究センターが、予定路線にある窯跡などの発掘調査を実施してきた。本年度も、この国道9号バイパス建設工事に伴う調査を、篠町の丘陵地や農地で行っている。そのうち、7月から実施した篠町森地区の工事用道路建設に伴う試掘調査中に、調査地付近から宝篋印塔の基礎を発見した。

2. 発見状況

発見地は、南西から北東にのびる小尾根の北西側斜面である。この斜面には、人工的に造成されたとみられる小規模なテラス状の平坦地が、裾部から稜部まで段々状に続いている。宝篋印塔基礎が発見されたのは、稜部近くの幅のせまい平坦地である。この平坦地に



第1図 発見地位置図 (1/25,000)



第2図 宝篋印塔基礎実測図

- | | | | |
|----|-----------|-----------|-----------|
| A面 | 格狭間内—奉造立 | 右側縁部—石塔—基 | 左側縁部—逆修人数 |
| B面 | 格狭間内—行滿 | 右側縁部—妙慶淨運 | 左側縁部—正受永仲 |
| C面 | 右側縁部—應永庚子 | 左側縁部—二月日 | |
| D面 | 右側縁部—明善明悟 | 左側縁部—明崇淨意 | |

この銘文から、この宝篋印塔が、応永庚子(27年・1420)の年の2月に逆修塔として造立

は、墓前の供物台とみられる石材も残っており、地形的にも、墓地であった可能性が高い。

宝篋印塔基礎は、腐蝕土上に乗った状態で発見されており、あまり古くない時期に動かされた形跡がある。しかし、その性格的・地形的要素からみると、動かされる以前の位置から大きく移動しているものとは考えがたく、むしろ置き直された程度と理解したい。

3. 宝篋印塔基礎の概要

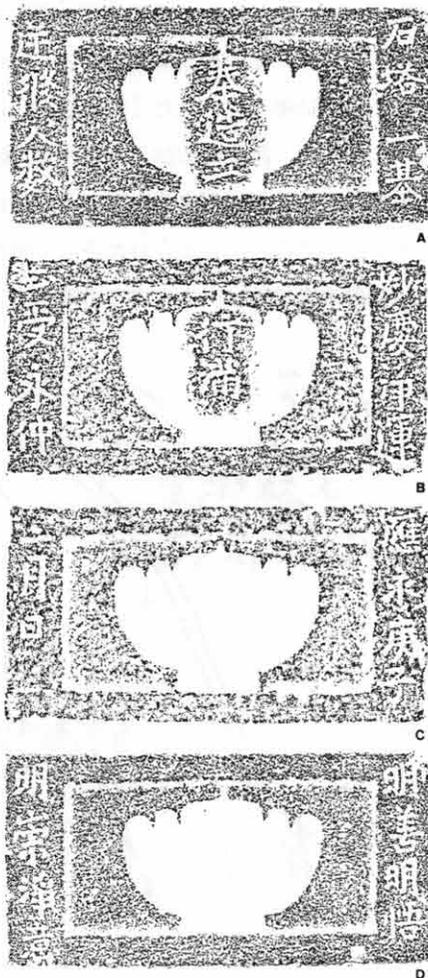
この宝篋印塔基礎は、一辺約28cmの正方形である。高さは約20cmを測る。その上端は反花座となり、反花座上には、一辺約16cmの正方形の塔身受け部がある。塔身受け部の中央には、直径約5cm・深さ約1.5cmの柄穴が穿たれる。以上のように、この基礎は、やや小振りであり、塔身や笠・相輪が揃ったもとの総高も、90cm前後と推定できる。

この基礎の四周には格狭間があり、格狭間内や側縁部には銘文が刻まれている。銘文は以下のとおりである。

・供養されたことが窺える。また、銘文の内容から、A面が正面であり、年号の刻まれたC面が背面になるものとみられる。A面に刻まれた「逆修人数」の銘文から、造立者は複数であり、A面に続くとみられるB面の銘文は、人名の可能性ある。「正受」のように、人名とするには不適當かと思われる字句もあるが、一応、出家した人の法名と理解しておきたい。D面の銘文については、願文的なものともとれるし、あるいは、B面と同じく人名とみることもできる。どちらであるのかの判断は、今は留保したい。ともかく、B面の格狭間内に刻まれた「行満」が中心となり、そのほか何名かの複数人の布施によって造塔された、ということであろう。なお、この銘文については、今後の検討も必要であり、その読み方や意味などについて、御教示をお願いしたい。

人名と理解したB面の銘文中の「永仲」という字句について若干付け足したい。醍醐寺文書の『篠村沙汰人連書請文文安元十^(注1)十』の文末に署名している11人の沙汰人のうちに、「今北永仲」の名前がある。この文書に記されている年号は文安元(1444)年であり、この基礎に刻まれた応永庚子年とは24年の差がある。したがって同一人物と断定することはできないが、もしそうであれば、この宝篋印塔の造立には、沙汰人階級の在地の有力者が加わっていたことを示す。不確かな史料ではあるが、この宝篋印塔に関する史料・資料が全くないので、参考程度にあえて紹介する。

この基礎の各部分を見ると、反花の蓮弁は、あまりのびやかな感はなく、鎌倉時代や南北朝時代のものに比べると、萎縮した弱い感じをうける。蓮弁中央部の盛り上がりも、南北朝時代のものに比べて張りが少ない。しかし、蓮弁の輪郭線は、近世のもののように硬いものではない。格狭間も、のびやかさのない萎縮したもので、爪先はやや高く外開き気味である。このように、

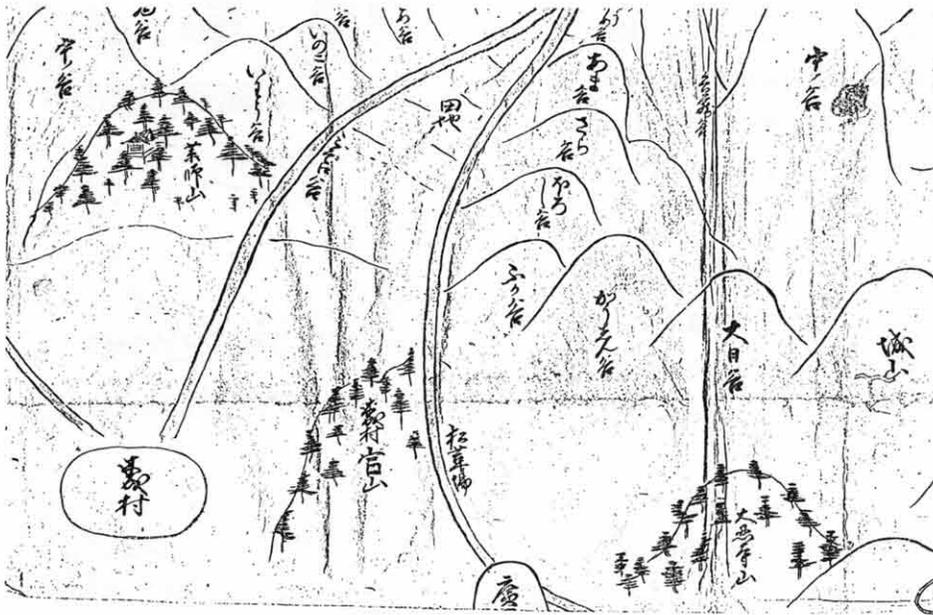


第3図 宝篋印塔基礎拓本

反花も格狭間も室町時代の特色を備えており、銘文中の年号と矛盾しない。また、時代が古い基礎ほど幅に対する高さが低いという傾向がある^(注2)とされるが、この基礎の高さと幅の比率は0.71であり、鎌倉時代や南北朝時代のものに比べてやや大きい。これは、鎌倉・南北朝時代のものより幅に対する高さが高いということであり、新しい傾向を示す。

4. 国恩寺との関連

江戸時代の文化年間から天保年間にかけて矢部朴齊によって著された『桑下漫録』^(注3)によると、森地区には「国恩寺」という寺があったことが記されている。明治期頃に廃寺となり、今は無い。『桑下漫録』には、足利將軍家の御教書や後花園天皇の宸翰が採録されており、勅願寺・將軍家の祈願寺として栄えた様子がうかがえる。この寺は、かつて森地区の集落の中にあつたが、天正年間、明智光秀が亀山城を築いた時に、伽藍がこわされて築城用材となり、その後、薬師山という所へ移転したとのことである。杉原家文書のなかの、天保2(1831)年に写された『野山絵図』には、この薬師山が記されている。この絵図の中の「城山」は、浄法寺城跡とみられる。蛇足ながら、浄法寺城の城主といわれる渡辺六郎頼方は、国恩寺領の領家花山院家から国恩寺の雑掌に任じられていたということである。ともかく、この絵図に記された浄法寺城跡や谷筋・道路などの位置関係からみると、宝篋印塔基礎の発見地は、まさにこの薬師山にあたる。



第4図 野山絵図(部分・下が北) 杉原家文書

以上のようなことから、この宝篋印塔基礎は、国恩寺に関連する遺物である可能性が高い。発見地の薬師山は、天正年間以降の国恩寺の寺地であり、宝篋印塔造立の応永庚子年よりもかなり新しい。この点については、国恩寺の移転に伴ってこの塔も移建されたともみることできる。また、今のところ天正年間以前の国恩寺の寺地については全く不明であるが、天正年間以前から薬師山が国恩寺の寺地に含まれており、それがために薬師山に移転してきたと考えることもできる。そうであれば、応永年間に薬師山に造塔されることもあり得る。いずれにしても、資料がほとんど無いので、今後の資料の増加を期待したい。

5. ま と め

今回紹介した宝篋印塔基礎は、四周に銘文が刻まれ、一部に欠けはあるものの明確に判読できる点に最大の特色がある。口丹波地域における数少ない中世の金石文の一例として貴重である。また、美術的な評価はあまり高くない時期のものではあるが、年号が刻まれており、様式的にも、室町時代の宝篋印塔の典型的な作例の一つとなり得る。今となつては幻となつた国恩寺に関係するとみられる資料としても評価できる。この資料一個としては語るところも少ないが、今後の資料の増加によっては、さらに多くのことを語りかけるものとならう。

最後に、国恩寺や古絵図について事細かに御教示していただいた永光尚氏、発見地や発見の状況について御教示していただいた発見者の竹井治雄氏、製図に協力していただいた岡本美和子氏に謝意を表する。 (引原茂治=当センター調査課調査員)

注1 竹岡 林ほか『丹波浄法寺城跡発掘調査報告』亀岡市教育委員会 1980

注2 川勝政太郎『日本石材工芸史』綜芸社 1957

注3 永光 尚『新編桑下漫録』3 口丹波史談会 1978

参 考 文 献

亀岡市史編纂委員会『亀岡市史』中巻 亀岡市役所 1965

川勝政太郎『京都の石造美術』木耳社 1972

昭和60年度発掘調査略報

13. 青野遺跡第9次

所在地 綾部市青野町吉美前
調査期間 昭和60年6月25日～8月6日
調査面積 約280m²

はじめに 今回の発掘調査は、白瀬橋改良工事に先立って実施したものである。当該地は、由良川左岸の自然堤防と呼ばれる微高地上に立地し、綾部市青野町一帯に広がる青野遺跡の一面に相当する。

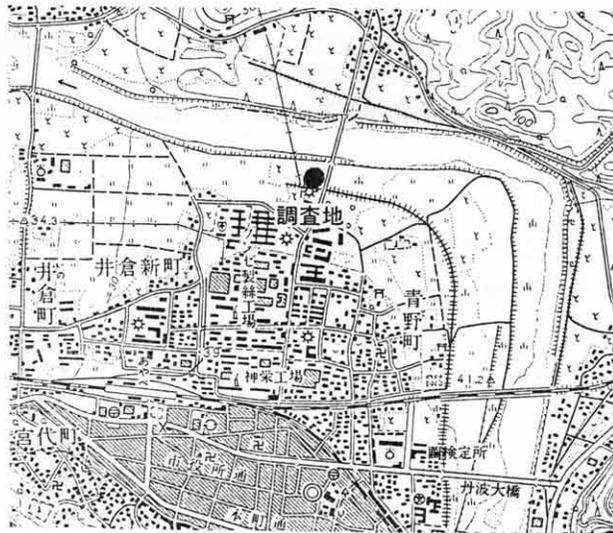
本遺跡は、過去8次にわたる発掘調査が実施され、弥生時代中期から奈良時代に至る長期間にわたって集落が営まれていたことが判明している。特に調査地近辺では、南・東・北側にそれぞれ接するような地点で発掘調査が行われ(青野遺跡A地点・第6次・第7次調査地)、やはり上記の時期に相当する竪穴式住居跡・溝・土塚等が検出されている。

そのため、当初から本調査地にもそれら遺構の存在していることが予想されていた。

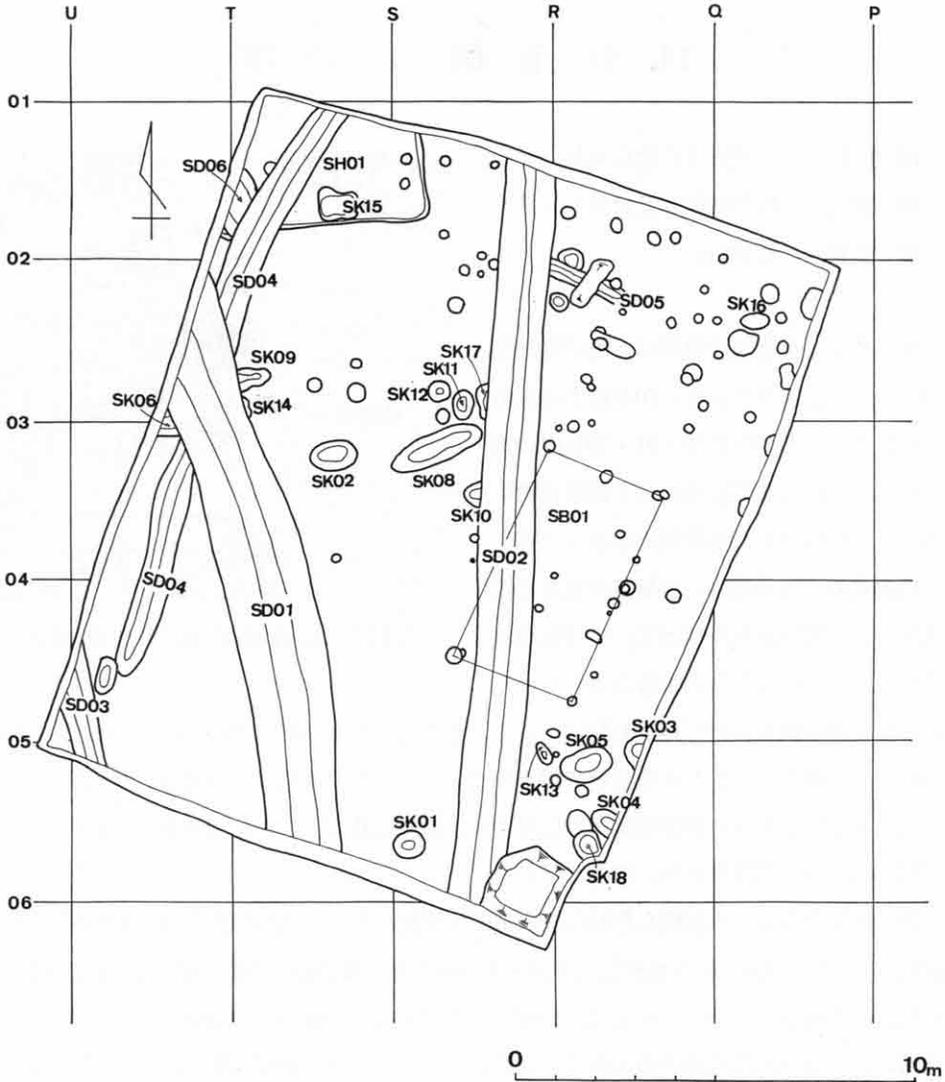
調査概要 遺構は、すべて地表下約60～70cmにある黄褐色土上面で検出した。検出遺構には、竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・溝・土塚などがある。それらは、時期の不明確なものを除き、大きく3時期(弥生時代中期・古墳時代前期・歴史時代)に大別される。

弥生時代中期と考えられる遺構には溝(SD02)や土塚(SK01～14・16)が、古墳時代前期と考えられる遺構には竪穴式住居跡(SH01)や溝(SD04)等がある。7世紀代と考えられる遺構には溝(SD01)や土塚(SK18)などがある。

その成果は、周辺部の調査と共通する内容の多いものであった。しかし、比較的しっかりした溝(SD01・02)の性格を含め、各時代の遺構の広が



第1図 調査地位置図(1/25,000)



第2図 トレンチ平面図

りやその位置づけなど、十分な検討を必要とする点も多くある。

広範囲な青野遺跡の中では、ごく一部の発掘調査であったが、青野A地点を中心とする地域においては、そこに広がる諸遺構の様相を知る上で貴重な資料を追加したと言えよう。

(森下 衛)

<参考文献>

- 釋 龍雄・山下潔巳他「青野遺跡A地点発掘調査報告書」(『綾部市文化財調査報告』第2集 綾部市教育委員会) 1976
- 辻本和美・小山雅人他「青野遺跡第6・7次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第6冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983

14. 小金岐 4 号 墳

所在地 亀岡市大井町小金岐
調査期間 昭和60年6月14日～8月9日
調査面積 約163m²

はじめに 小金岐古墳群は、亀岡盆地北西部の行者山東麓にあり、70基以上の古墳が密集している。昭和50・51・59年度の調査によって、6世紀後半から7世紀中葉頃にかけて築造された古墳群とされている。

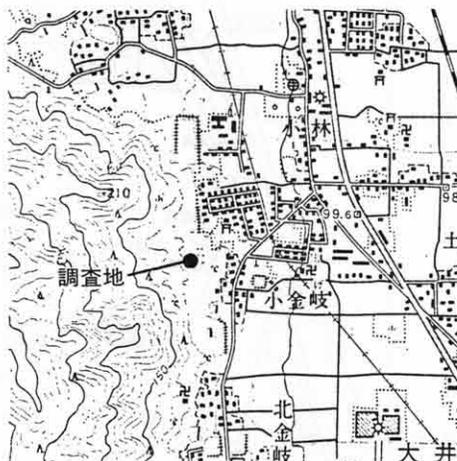
調査内容 4号墳は、古墳群の東端に位置する。後世の土採りなどで、ほぼ全壊状態に近い。当初は1基の古墳とされていた

が、伐採後の地表観察や地形測量によって、少なくとも4基の古墳の痕跡であることがわかり、それぞれにトレンチを設けて調査した。このうち、3基については、須恵器が出土したり、墳丘盛土状の層序を確認したものの、埋葬主体部は、後世の土採りや江戸時代の墓塚などによって攪乱され、消滅していた。

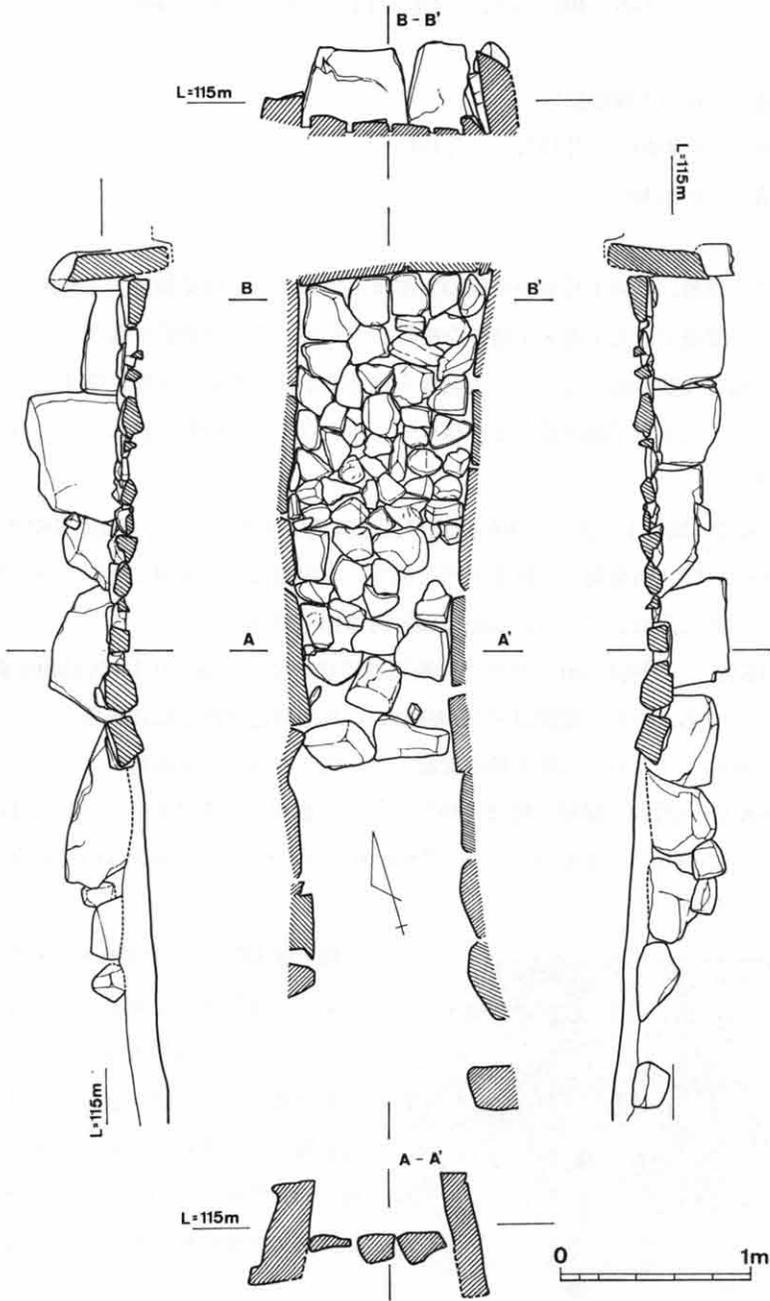
あと1基からは、小規模な無袖の横穴式石室を検出した。石室は南南西方向に開口する。石室の長さは4.4m、幅は奥壁部で1m・開口部付近で0.8mを測る。各壁とも、最下段の石積みのみ残存している。床面は、敷石がある部分とない部分とに分かれ、ある部分が玄室部、ない部分が羨道部とみられる。また、敷石がとぎれる箇所と開口部に、閉塞石状の石積みがみられる。なお、石室床面からは、全く遺物が出土しなかった。墳丘は、ほとんど削平されているが、断面観察によると、直径約7mの円墳とみられる。

また、調査地内から数条の溝状遺構を検出した。出土遺物がなく時期や性格は不明であるが、断面観察によると、墳丘築造以前のものである可能性もある。

まとめ 今回検出した石室は、石室内から遺物が全く出土しなかった。石室埋土の状況を見ると、攪乱された形跡はなく、埋葬時に副葬品を入れなかった可能性が高い。従って、築造時期は不明である。同じく無袖の石室をもつ小金岐6号墳が、7世紀中葉頃の築造とされており、ほぼ同じ頃の築造であろうか。すでに確認された小金岐古墳群の石室では最小のものであり、小金岐古墳群の終焉を示すものかもしれない。(引原 茂治)



第1図 調査地位置図 (1/25,000)



第2図 石室実測図

15. 篠・黒岩作業場跡

所在地 亀岡市篠町黒岩
調査期間 昭和60年5月10日～7月15日
調査面積 約320m²

はじめに 従来、黒岩1号窯の西側の谷部は、地形から「作業場跡」と推定されており、昭和59年度の調査で柱穴・溝・土塚等を検出したため、その可能性が強まった。今回の調査でも、土塚を4基確認した。この土塚からは遺物が出土せず、炭層と焼土層が主として堆積していることから「焼土塚」と呼ばれている。以下、この焼土塚について略述する。

遺構概要

焼土塚SK01 黒岩1号窯の北方約12mの急傾斜地に位置し、すぐ東側にSK02がある。直径約1m・深さ0.2mを測り、断面台形を呈する。炭層は底部全面に広がるが、焼土は底面西半部と側面に点在している。底面の傾斜角は10°である。

焼土塚SK02 一辺約1.5mの方形で、断面は皿状を呈し、深さ0.1～0.15mを測る。側面は緩やかに立ち上がり、底面は凹凸が激しい。炭層は底部西半部に堆積し、焼土は底部と西側面に集中しており、二次堆積の炭混じりの焼土も多い。傾斜角は4°である。

焼土塚SK03 SK04と同様、緩傾斜地に位置し、断面台形を呈する。直径約1m・深さ0.15mを測る。炭層はやや粘土を含み、3～5cmの厚みを持つ。焼土は南半部全面に広がる。傾斜角は5°である。

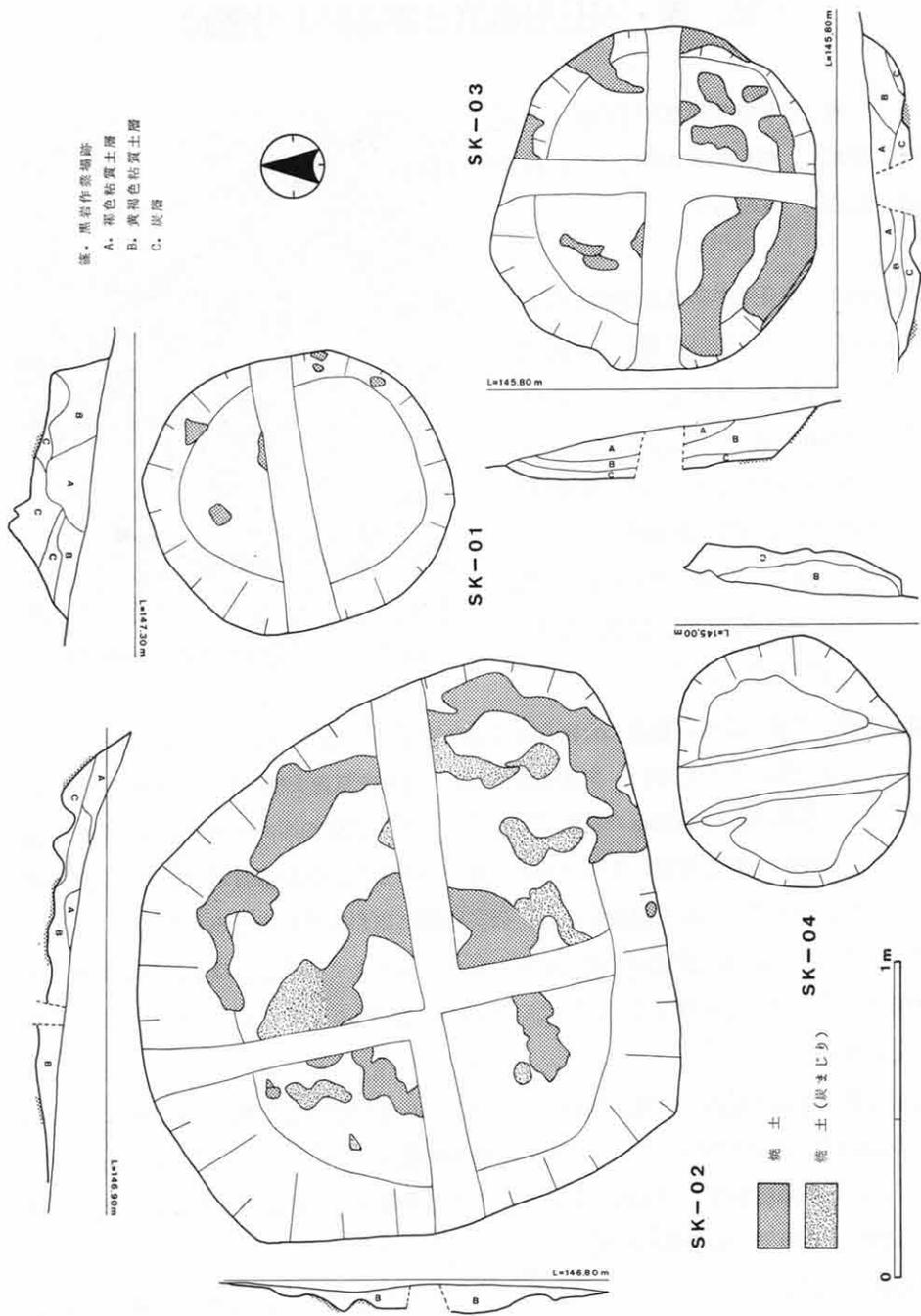


第1図 調査地位置図 (1/50,000)

焼土塚SK04 直径約0.8m・深さ0.15mを測る。黄褐色土と炭層のみで焼土は全く認められない。傾斜角は4°である。

まとめ 4基の焼土塚の共通点は、①褐色粘質土層・黄褐色粘質土層・炭層・焼土層の順に堆積していること、②炭層はSK02を除いて底面全体にあり、その底部ほど厚い。焼土層は逆に底面の高い位置にある。

焼土塚は、形状から人為的なものだが、用途については、たき火跡・炭焼場跡等が考えうるが、決定するに至らない。



第2図 遺構実測図

(竹井 治雄)

16. 篠・西長尾奥第2窯跡群1号窯跡

所在地 亀岡市篠町王子西長尾・西山
調査期間 昭和60年10月1日～12月18日
調査面積 約530m²

はじめに 西長尾奥第2窯跡群1号窯跡は、亀岡市篠町の丘陵部に分布する篠窯跡群のうちでも東側に位置するものである。標高は、190m前後であり、これまで調査した窯跡のなかでは最高所にある。昭和54年度の試掘調査によって、灰原を確認し、窯跡の存在を予想していた。また、灰原が広範囲に及ぶことから、複数の窯体が存在する可能性も想定していた。



第1図 調査地位置図 (1/25,000)

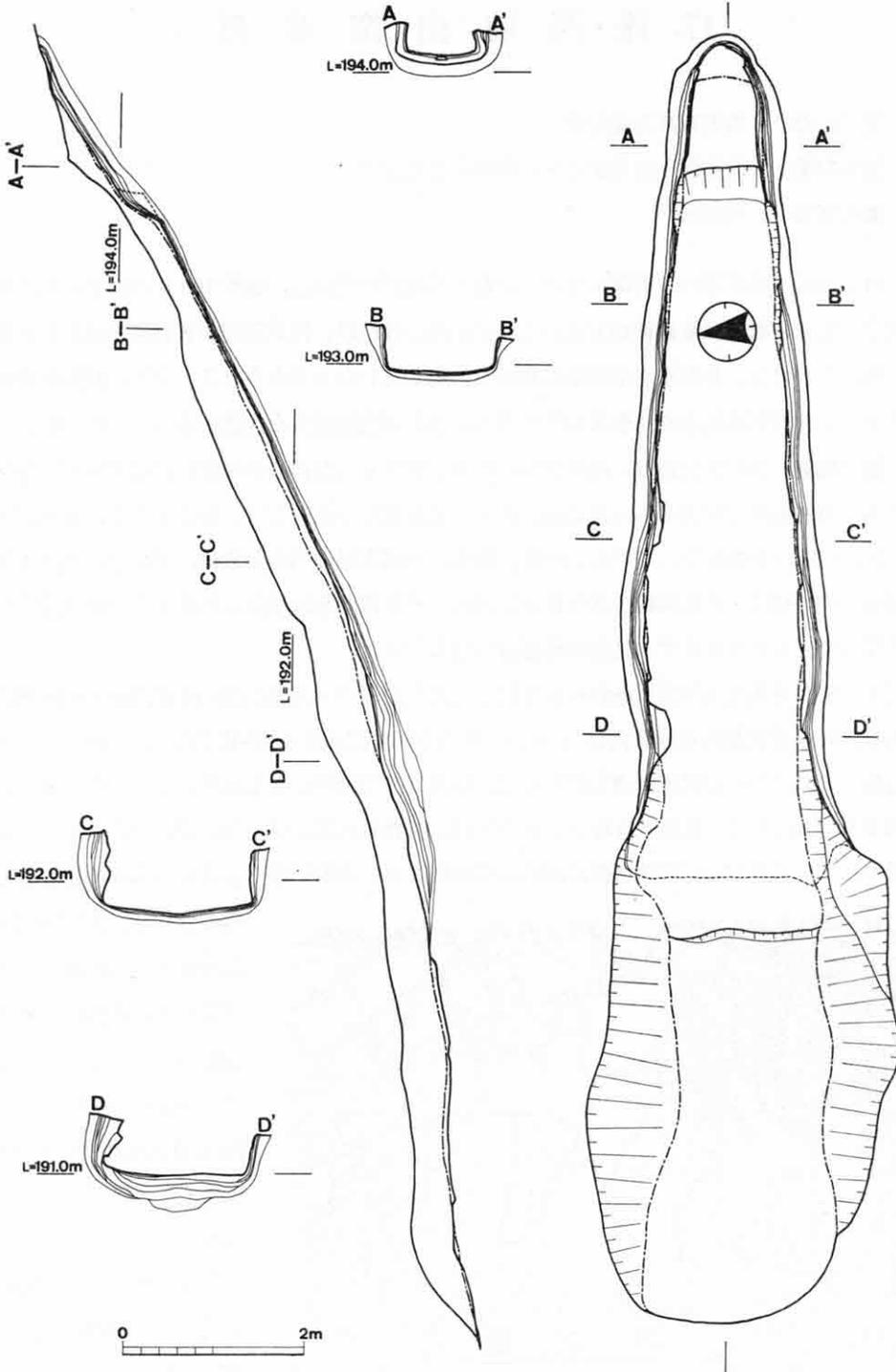
調査内容 調査の結果、検出した窯体は1基である。須恵器を焼成した半地下式の登り窯である。天井部は残存しない。窯体の長さは約9m・床面最大幅は1.8mを測る。窯体の下部に、長さ約5.6m・幅約3mの前庭部がつく。窯体・前庭部をあわせた全長は約14.6mに及ぶ。窯体焚口部付近では、3次にわたる床面がみられ、煙道部付近にもそれに伴う改修を行った痕跡がある。出土遺物からも、操業時期に幅があるものとみられる。

窯体中や灰原からは、多量の須恵器が出土した。これまで調査した篠窯跡群の窯跡の出土遺物にくらべて、特徴的なことは、大形品が多いということである。ことに、大形の甕の破片が多い。

窯体床面の傾斜角度は、14度から25度であり、これまで確認した篠窯跡群の例にくらべて、かなり緩いものである。これは、大形の甕を焼成していたことによるものとみられる。すなわち、傾斜角度がきついと火のまわりが早く窯体内の温度が急激に上がり、大きい製品が窯割れするので、傾斜角度を緩くしたものであろう。

まとめ 今回検出した窯体は、篠窯跡群においてこれまで確認した窯体のなかでも、最大規模のものである。また、構造的にも大形製品を焼成することを目的とする窯とみられ、これもはじめての検出である。出土遺物は8世紀後半頃のもので、篠窯跡群のうちでも最も古い窯跡の1つである。

(引原 茂治)



第2図 窯体実測図

17. 篠・西前山窯跡群

所在地 亀岡市篠町森前山
 調査期間 昭和60年11月20日～昭和61年2月27日
 調査面積 約150m²

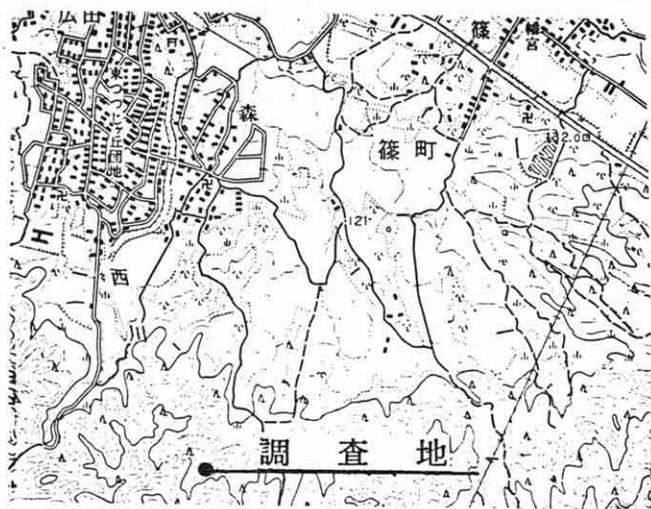
はじめに 亀岡市の西南部にあたる篠町の丘陵部一帯には、総数100基を越す一大窯業地として知られる篠窯跡群が分布している。篠窯跡群は、操業期間が8世紀中頃から11世紀初頭にわたり、長岡京や平安京に製品を供給していたと考えられる。今回、篠窯跡群の西端に小柳川都市対策砂防事業が計画され、事前に発掘調査を実施することになった。

調査概要 西前山窯跡は、旧堰堤部の南東に設けられた林道の崖面に灰原が一部露呈し、さらに約30mほど峡谷を入った地点に窯滓や須恵器片が点在していたことから、2基以上の窯跡の存在が推定されていた。調査の結果、灰原露呈の個所からは、半地下式登窯1基(西前山1号窯)・窯状遺構1基を検出したが、峡谷部からは摩滅した杯・椀(10世紀代)や窯滓が出土したにすぎず、窯体の確認はできなかった。

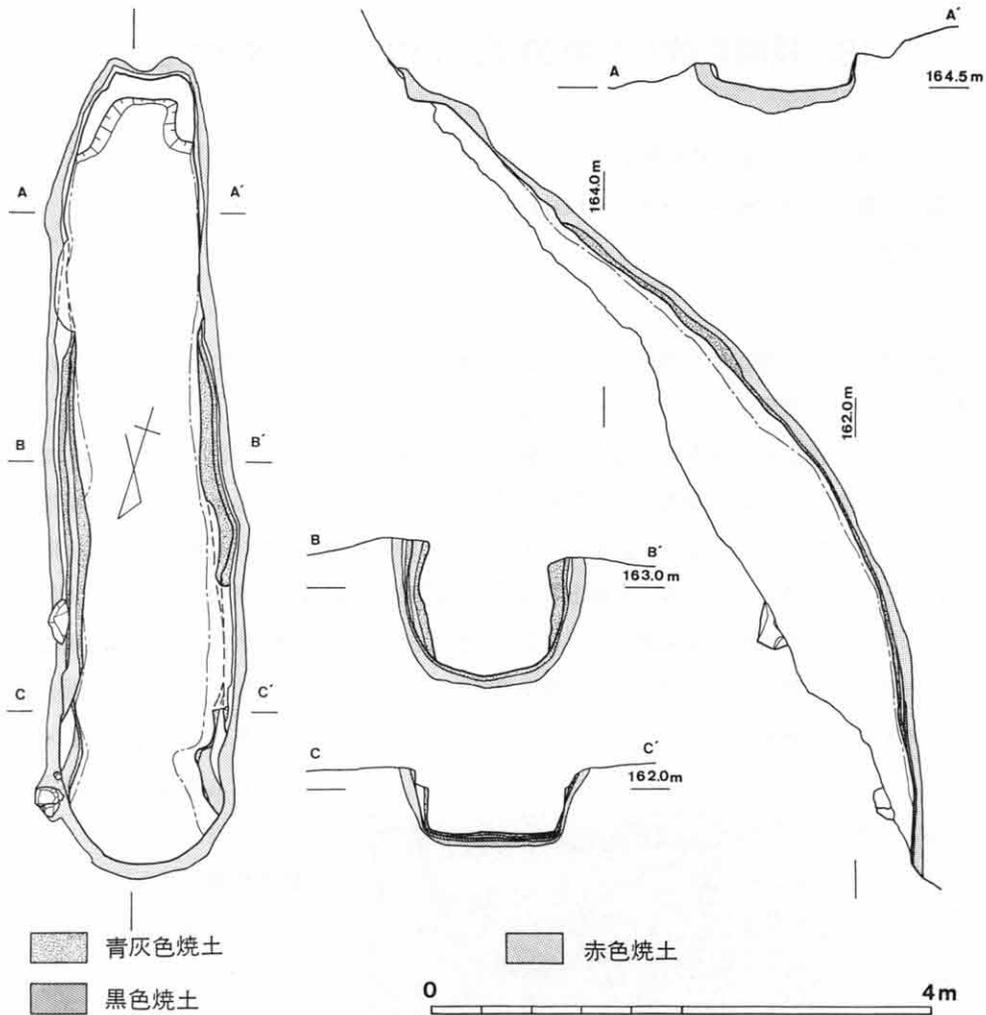
〔1号窯〕丘陵北西斜面に築かれた半地下式登窯で、窯体規模は残存長6.7m・焼成部最大幅1.6m・焼成部床面傾斜角25°を測る。窯体主軸方位はN-163°-Eである。窯体天井部は崩落しているが、両側壁は遺存状態のよい焼成部分で床面から1mを測る。焼成部・焚口部では2次にわたる修復の痕跡が認められた。また焼成部と煙道部の境にあたる両側壁は、画するように約15cmずつ内側に湾曲して検出され、燃焼効率をよくするための構造とも

考えられる。灰原は、南北10m・東西10mと扇状に広がり、黄褐色土・赤色焼土を境として少なくとも4層に分かれる。遺物は、9世紀後半の杯身・杯蓋・壺・硯などが出土した。

〔窯状遺構〕窯状遺構は、1号窯北東10mの位置で検出した。窯体は、丘陵稜線に平行に築かれてい



第1図 調査地位置図(1/25,000)



第2図 西前山 1号窯実測図

る。丘陵側の壁及び床面が一部残り、谷川部は削平を受けていた。床面直上には黒灰・炭が堆積しているが、遺物の混入はなかった。推定規模は、幅1.3m・長さ3.5mである。窯の形態及び検出状況から須恵器(素焼き)焼成窯とは認め難く、用途不明の窯(構造物)である。

まとめ 篠窯跡群は老ノ坂峠から西前山まで東西約3kmの範囲内に分布しており、時期的には8世紀中頃の窯跡が東側、9・10世紀の窯跡が西側に築かれている。このように築窯においては東から西へという傾向がみられ、工人集団の移動・燃料消費等を考えるうえで興味ある資料が得られた。また篠窯跡群では10世紀を境として登窯から小型窯へと窯体構造が変化し、その画期を考えるうえでも貴重な資料となった。(水谷 寿克)

18. 長岡京跡右京第206次 (7ANSKT, 7ANTGT 地区)

所在地 乙訓郡大山崎町大字円明寺小字門田, 大字下植野小字五條本
調査期間 昭和60年9月9日～12月19日
調査面積 約107m²

はじめに この調査は、国道171号の歩道設置工事に伴う事前調査であり、建設省から委託を受け、当調査研究センターが主体となって実施した。

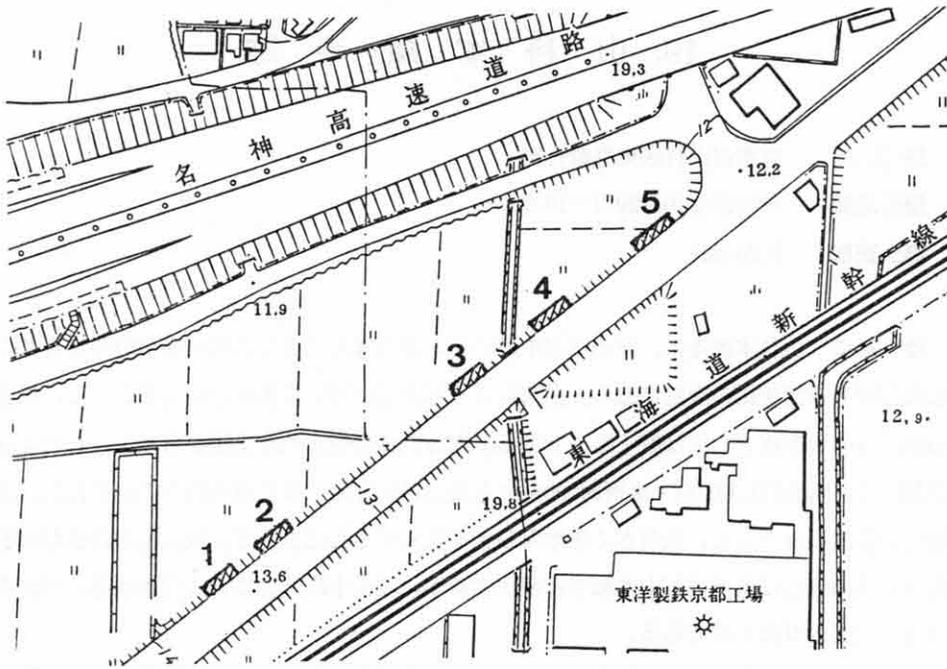
調査地は、国鉄東海道本線「大山崎」駅の北東約2kmの位置にあり、本来水田として利用されていたが、宅地化が進み、耕作地は減少の一途をたどっている。京都盆地の南端部にあたり、東に石清水八幡宮の鎮座する男山、西には天王山が迫り、近傍で宇治川、桂川、木津川の三川が合流している。遺跡としては、長岡京跡の最南部にあたり、条坊復元によれば、調査対象地内を九条大路が東西に通る、南北道では、西一坊大路が、対象地東端付近で九条大路に接する位置であるが、桂川あるいはその支流の小畑川、小泉川にも近い沖積地であり、不確定な要素も残している。また、弥生・古墳時代の集落跡である官脇・松

田遺跡にも重なり、山崎津にも近い環境である。

調査概要 調査は工事対象区間の中で擁壁工事が行われる部分を中心として、耕作地に面した場所に5本のトレンチ(南西から第1～5トレンチ)を入れた。各トレンチの基本的な層序は、地表から耕作土、黄灰色粘質土(床土)、灰褐色粘質土があり、以下に青灰色粘質土、灰色砂層や茶褐色砂礫層などが堆積している。灰褐色粘質土層については堆積も厚く、さらに細分すると砂粒の多少、色調の明暗



第1図 調査地位置図 (1/50,000)



第2図 トレンチ配置図 (1/2,500)

などの若干の変化によって4～5層ある部分も認められ、数次にわたって水田化された痕跡と考えられる。特に、顕著な遺構は検出できなかったが、第5トレンチで現在に残る畦畔に平行な溝があり、中世以降に属するものと考えられる。第1トレンチでは遺構に伴わないが、古墳時代前期の全体を復元できる小型丸底壺が1点出土した。隣接地で行われた長岡京跡右京第188次調査においても同時期の遺物が出土しており、天王山裾から東方に広がる低位段丘上に立地する官脇・松田遺跡の縁辺部にあたることを示している。

第1～5トレンチを通して出土遺物には、古墳時代以降、近世に至るまでのものが断片的に見られるが、小破片が多く、その全体を復元できるものは極めて少ない。その種類は所属時期に関係なく列挙すると、土師器・須恵器・瓦類・瓦器・陶磁器類がある。古墳時代のものでは、前記の小型丸底壺のほか、後期の須恵器杯蓋があり、主に1・2トレンチから出土している。長岡京期に前後する時期では、土師器杯、須恵器杯A・Bや杯蓋、鉢などがある。鎌倉時代以降のものでは、4トレンチから播鉢、5トレンチから外面に鑄蓮弁を有する青磁椀片がある。

この調査地付近は、現在、高速道路、新幹線、国道171号などが錯綜するとともに各河川の氾濫域であったため、不明な点が多かったが、近年、予想以上の広がりを持つ各時代の遺跡の存在が判明し始めている。(長谷川 達)

19. 山科本願寺跡

所在地 京都市山科区東野舞台町
調査期間 昭和60年10月29日～12月6日
調査面積 約200m²

はじめに 山科本願寺は、浄土真宗中興の祖、蓮如兼寿により文明10(1478)年に再興された本願寺教団初期の寺院である。要塞のように土居(土塁)で街の中心部を包囲し、城郭の形式をもつ寺院としては府下唯一である。部分的に形を止める土居から復元された寺域の範囲は、南北約1,000m・東西約500mにも及ぶ(第1図)。また東を流れる山科川は、本願寺の自然の堀として、当時から重要な役割を担ってきたと言える。天文元(1532)年の戦災後、蓮如兼寿は大坂の石山本願寺に移住するが、石山本願寺はこの山科本願寺の形式をさらに発展させたものである。

今回の調査は、山科川の河川改修工事に伴って実施したものである。調査地は、山科中学校と山科川に挟まれた河川敷で、本願寺の寺域範囲から外れた南端の近隣地である。

調査概要 今回はA・B2つのトレンチを設け、地表下約2.5mまで掘り下げた(第2図)。両トレンチとも、瓦礫混じりの盛土の下は、砂礫層が東側で厚く堆積していた。一方、西側の河岸近くでは暗黄褐色極細砂で築かれた旧堤防状遺構を検出した。これは山科川と並行し、南側のBトレンチでの規模は、高さ約2.4mを測る。全体を補強するために、中間に石を敷きつめる工法が採用されたようである。さらに、この堤防状遺構の東側では小規模な流路があったことも判明した。堤防にはほぼ並行して流れ、両トレンチで確認している。Aトレンチでみると、幅約0.8～1.2m・深さ約30cmを



第1図 調査地位置図 (1/25,000)



第2図 調査トレンチ全景(南から)

測る。内には角のとれた小礫がぎっしりと詰まっていた。また、流路の両側には、直径10cm内外の杭跡も残っていた。

出土遺物としては、堤防状遺構中から若干の陶磁器類(壺・染付・すり鉢)がみられた。陶磁器類の時期は、不明なものも多いが、おそらく近代～現代に至るものである。また、Aトレンチの西側最下層(暗灰褐色砂礫)の直上から弥生土器片が1点出土した。壺の胴部で口縁部に近い部分と思われる。外面に顕著な磨き痕がみられる。

まとめ 今回の調査では、山科本願寺跡に関連する遺構・遺物は検出されなかった。今回の調査成果は以下に示すとおりである。

①現在の山科川に並行して築かれた堤防状遺構の存在が明らかとなった。暗黄褐色極細砂をベースに築き、高さは約2.5m前後を測る。ほぼ中間部に約1.2mの幅で石を敷いていた。

②堤防状遺構の東側で、小規模な流路跡を検出した。この流路跡・堤防状遺構とも、時期は近代～現代のものである。

③Aトレンチの最下層にて検出した弥生土器片は、土層の観察から原位置を止めていないが、調査地の南に広がる中臣遺跡(弥生時代～古墳時代後期)との関連で理解し得るものである。

(黒坪 一樹)

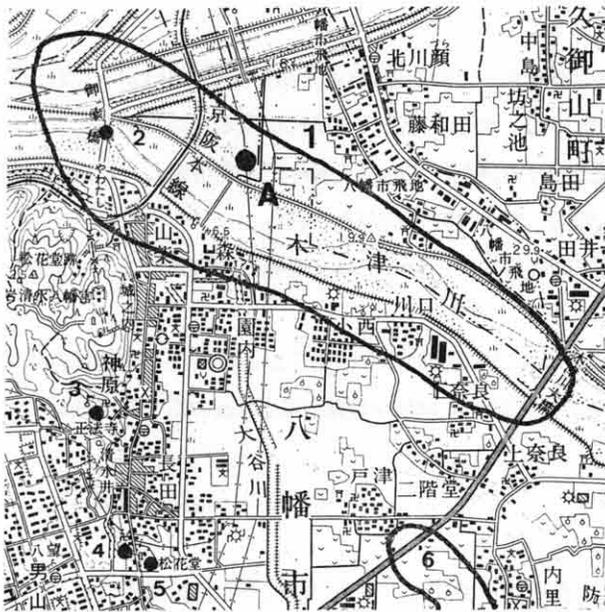
20. 木津川河床遺跡

自家発電機棟・第1ポンプ棟新設工事に伴う発掘調査

所在地	八幡市八幡焼木	
調査期間	自家発電機棟建設予定地内	昭和60年8月1日～27日
	第1ポンプ棟建設予定地内	昭和60年9月9日～11月30日
調査面積	自家発電機棟建設予定地内	約210m ²
	第1ポンプ棟建設予定地内	約700m ²

はじめに 木津川河床遺跡の調査は今年度で4年目を迎えており、これまでに古墳時代後期の竪穴式住居跡を中心とした集落跡を確認した。60年度には、汚泥脱水機棟・自家発電機棟・第1ポンプ棟新設予定地の発掘調査、場内整備に係る立会調査があり、汚泥脱水機棟建設予定地内の調査については、本誌17号に略述した。今回は、自家発電機棟・第1ポンプ棟新設工事に伴う発掘調査分(第1図 A地点)を報告する。

自家発電機棟新設予定地内の調査 自家発電機棟建設予定地は、古墳時代後期の竪穴式



第1図 周辺遺跡分布図(古墳時代関係)(1/50,000)

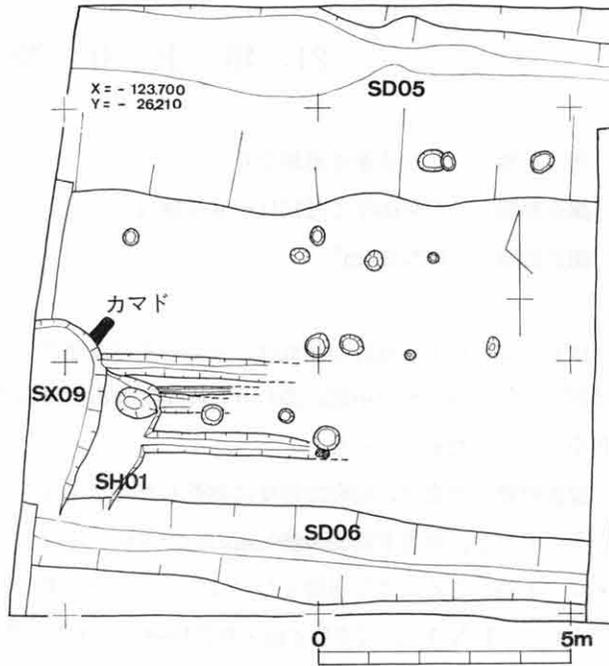
1. 木津川河床遺跡
2. 御幸橋古墳
3. 石不動古墳
4. 西車塚古墳
5. 東車塚古墳
6. 内里五丁遺跡

住居跡10棟を検出した管理本館下調査地の約20m東に位置している。その住居跡の分布から、この調査地内にも住居跡の存在が予想された。建設予定地は300m²で、約15m×15mの発掘区を設けた。

検出遺構は竪穴式住居跡・流路・中世素掘り溝・柱穴群などである。住居跡は、西半をSX09で削平されているため、正確な規模は不明である。カマドの煙道の一部と貯蔵穴を検出した。SX09は、大半が調査地外にあるため、その性格・形状は不明である。埋土

から須恵器杯蓋・土師器片が出土し、住居跡の時期と近接している。竪穴式住居跡の可能性はある。

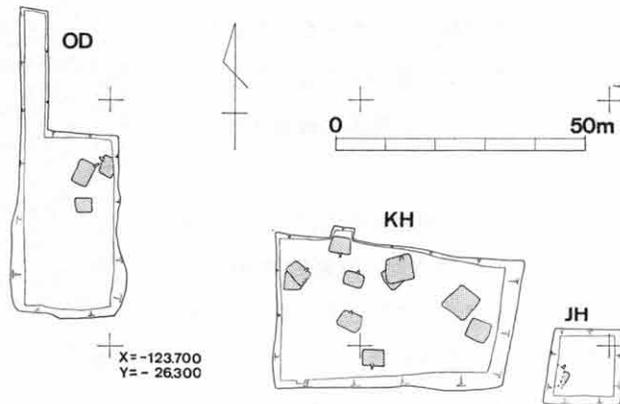
第1ポンプ棟新設予定地内の調査 第1ポンプ棟は自家発電機棟の東側約30mに、30m×50mの範囲に予定されている。ここは、昭和57年度に調査を行ったエアレーションタンク棟の南側にあたり、なかでも弥生時代後期～布留式段階の土器が集中して出土したB・C・Fトレンチに近接しており、同時期の遺構が確認されることを期待した。



第2図 自家発電機棟新設予定地内検出遺構

検出遺構には中・近世の素掘り溝・不明落ち込み、弥生時代後期の土坑・溝等があるが、住居跡・建物等の集落と関わる遺構は検出できなかった。弥生時代の溝は、幅1.5～2.2m・検出長6.0mを測り、埋土から弥生時代後期～庄内期の土器片が出土している。

まとめ 今年度の3つの調査地のうち、汚泥脱水機棟・自家発電機棟の新設予定地より古墳時代後期の竪穴式住居跡が検出された。これらは、管理本館下の集落の広がりの中で捉えられ、その分布を第3図に示した。大きくは、6世紀後半から7世紀中葉にかけてのものであるが、切り合い関係や各住居の占有空間、出土土器の差異から、3～4時期に細分でき、検出した14棟に限ってみれば、一時期には2～4棟が建てられていたと考えられる。未調査部分も含めると、10棟前後で集落を形成していたといえよう。(岩松 保)



第3図 古墳時代後期竪穴式住居跡分布図
(OD:汚泥脱水機棟, KH:管理本館, JH:自家発電機棟の調査地略号)

21. 隼 上 り 遺 跡

所在地 宇治市菟道東隼上り
調査期間 昭和60年4月16日～9月18日
調査面積 約2,200m²

はじめに 隼上り遺跡の調査は、京滋バイパス建設に伴う事前調査である。今回の調査は昭和59年度調査地の中間にあたり、昨年度検出した奈良時代のピット群や中世墓群の範囲を確認するために行った。

調査概要 調査は、昭和59年度に調査した第2・3トレンチと第4トレンチの中間部分を全面掘削し、地表下約50～250cmの面で遺構を検出した。検出した遺構には、土坑・溝・ピット等がある。主な遺構としては、トレンチ北東部で検出したL.N.1とピット群があげられる。L.N.1は、長さ約4m・幅約1～2.5m・深さ約40cmの溝状を呈する土坑である。ここからは、奈良時代の須恵器・土師器・瓦などが出土している。ピット群は、昭和59年度の第4トレンチ北西部のピット群と一連のものであるが、ピットの配置が不規則であるため、掘立柱建物の柱穴とすることは難しい。

遺物は、古墳時代～江戸時代にわたるが、そのほとんどが包含層からの出土である。主な遺物としては、前述のL.N.1から風字硯が出土している。また、採集品であるが、川原寺式の軒丸瓦がある。中世の遺物では、青磁椀・青磁四耳壺・白磁椀などの中国製陶磁器類、瓦質羽釜などがある。

まとめ 今回の調査では、当初の目的であった中世墓は検出しなかった。しかし、中国製陶磁器類や瓦質羽釜などが存在することから、かなり早い時期に破壊されていた可能性がある。

また、L.N.1の遺物や軒丸瓦などに代表されるような、調査地の南東約200mのところにある大鳳寺との関連を示唆する遺物が多いことも注目される。

(荒川 史)



調査地位置図 (1/50,000)

1. 隼上り遺跡 2. 隼上り1号墳

22. 隼 上 り 1 号 墳

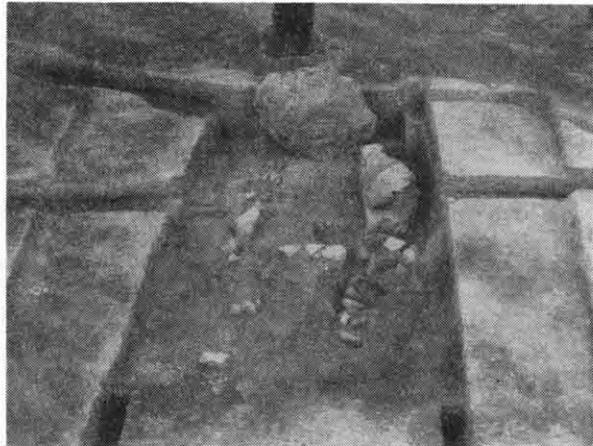
所在地 宇治市菟道西隼上り
 調査期間 昭和60年7月29日～11月27日
 調査面積 約700m²

はじめに 隼上り1号墳の調査は、京滋バイパス建設に伴う事前調査である。隼上り古墳群の調査は、昭和59年度の2・3号墳に続いて3基目となる。この古墳は、茶畑の中に低いマウンドを望見できたためかねてより知られており、最も遺存状態のよい古墳と考えられていた。

調査概要 調査は、まず耕作土を除去したが、この段階で石組みを持つ古墓群4基を検出した。規模は、最小で1.2m×1.4m・最大で1.7m×1.9mを測る。遺物についてはこのうちの1基から鉄釘と不明鉄製品が出土しているのみであるため、墓の時期は不明である。

古墳は、大部分は削平されており、明確な周溝も持っていない。しかし、墳丘の立ち上がりの部分を確認した。これによると南北約23m・東西約22mの円墳である。埋葬施設は横穴式石室であるが、この石室も早い時期から石材の抜き取りをうけ、さらに前述の古墓が石室の上に造られたため、奥壁の石材は玄室に倒れた状態で、側壁も4石を残すのみである。しかし、石材の抜き取り痕などから全長約9.4m・玄室長約4.6m・玄室幅約1.5～1.9m・羨道長4.8m・羨道幅1.35mの両袖式横穴式石室が復元できる。

遺物は、須恵器(杯身・杯蓋・高杯・長頸壺・甕・特殊扁壺)、土師器(甕・甔)、鉄製品(鉄鏃)がある。遺物から6世紀後半に築造され、7世紀中ごろまで追葬が行われたと思われる。遺物の中で特筆すべきものとしては、特殊扁壺があげられる。この土器は、これまで三河・美濃・伊勢・近江に類例があり、東海地方と宇治地域とが深いつながりを持っていたことを示唆する資料である。(荒川 史)



隼上り1号墳完掘状態(南西から)

23. 木津遺跡第4次

所在地 相楽郡木津町大字木津小字南垣外15外2分筆
調査期間 昭和60年10月7日～昭和61年1月18日
調査面積 約800m²

はじめに 木津町の市街地を中心に広がる広大な木津遺跡(84万m²)は、現在まで4度(次数欠番の1度を含む)の発掘調査が行われ、奈良時代から江戸時代に至る遺跡として知られている。今回の調査は、木津警察署の庁舎新築工事に伴う事前調査であり、解体工事等の工程の関係で、西地区(旧署長公舎→新車倉庫)・浄化槽地区・北地区(旧駐車場→新庁舎北半)・南地区(旧庁舎→新庁舎南半)の4地区に分けて調査した。

調査概要 基本的な層序は、上から約70cmの攪乱層(昭和30年～現在)の下に明治30年の整地層が見られ、さらに下に上下2層からなる包含層(弥生～江戸時代の遺物を含む耕作土層)がある。検出された遺構は、この包含層をのせる黄褐色砂質土の地山に掘り込まれたものである。遺構には、土坑・溝・ピット・池等があり、大きく2時期に分かれる。

I期に属する遺構は、西SD08・SX02, 北SG01・SD31, 南SG02・SD02で、15～16世紀に埋没したと考えられ、土師皿, 土師質と瓦質の羽釜, 瓦質と陶質の挿鉢, 瀬戸・美濃系の灰釉及び黒釉陶器に混じて青磁・青花等の輸入陶磁が出土している。

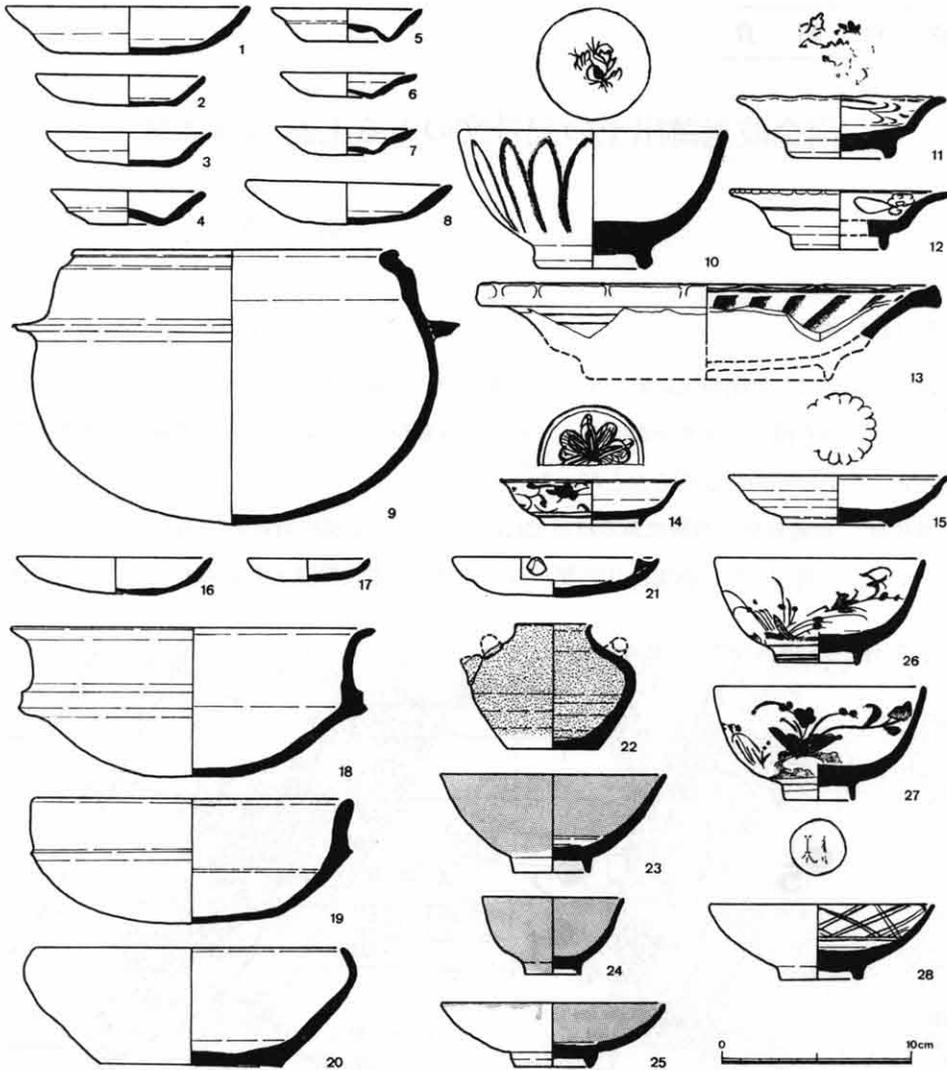
II期に属する遺構は、今回の調査で最も多い。主なものとして、瓦質大甕を埋置した北SX05・SX36, 南SX03, 長楕円ないし円形の掘形の土坑: 北SK06・07・14・15・28, 南SK06・07が挙げられ、皿・炮烙等の土師質土器, 椀・皿・鉢等の唐津系陶器, 染付椀・皿・青磁椀・皿等の伊万里系磁器, 信楽系挿鉢,

瓦質大甕, 宋銭及び寛永通宝等の遺物が出土した。

まとめ 中世末期の池状遺構や溝の性格づけは難しいが、鎌倉時代以降中世全期にわたる遺物が混入しており、輸入陶磁器や古瀬戸(四耳壺か), それに瓦等の存在から、当地, あるいは近隣に寺院ないし豪族(文献では「木津殿」やその配下の「庄村氏」が知られる)の居館が想定されるかも知れない。近世前期と思われる焼土層から推定できる火災の後、江戸時代中期には瓦質大甕棺を使用



第1図 調査地位置図 (1/25,000)



第2図 木津遺跡出土主要遺物

I期：1～8 土師皿，9 羽釜，10～13 中国青磁，14 中国青花，15 瀬戸美濃灰釉

II期：16・17 土師皿，18～20 炮烙，21 施釉土器，22 美濃系，23～25 唐津系，26～28 伊万里染付

した墓と多数の土器・陶磁器を伴うゴミ穴群とが共存しているように見えるが、各遺構の性格についてはさらに検討が必要である。上記の土坑群の出土遺物は、各々一括資料と見なせるものであり、従来看過されがちであった近世の土器や陶磁の研究に有益な資料となる。

一方、包含層から多数の奈良時代の土器や瓦とともに、数点ではあるが、後期弥生土器や5世紀前後の須恵器や埴輪片が出土しており、従来、奈良時代以降とされてきた木津遺跡がさらに古い時代へさかのぼることを示唆している。

(小山 雅人)

資料紹介

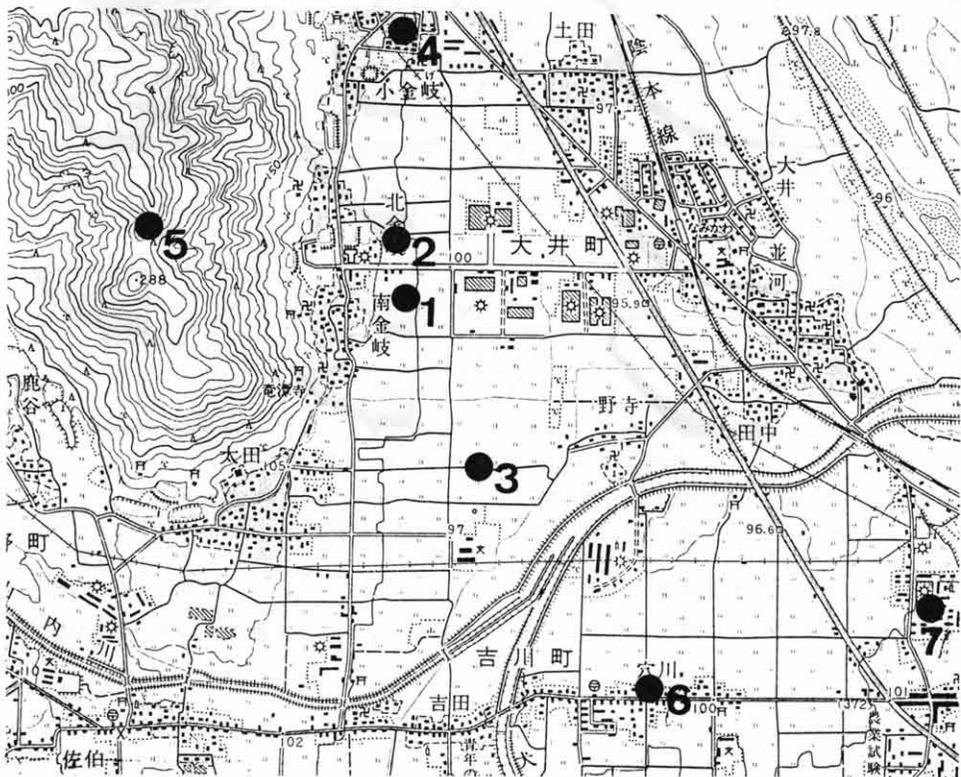
南金岐遺跡出土の記号文のある土器〈図版参照〉

田代 弘

1. はじめに

南金岐遺跡は、亀岡市大井町に所在する弥生時代後期を中心とする集落遺跡である。1981年、当調査研究センターが国道9号バイパス敷設工事に先立って発掘調査を実施したところ、初めてその姿が明らかとなった。^(註1)

遺跡は、亀岡盆地の西端にある標高431mの行者山の東麓にあたり、低位の丘陵上に立地している。周辺には、弥生時代前期から中期初頭の環濠集落と考えられている太田遺跡



第1図 南金岐遺跡の位置と周辺の弥生時代遺跡 (1/25,000)

1. 南金岐遺跡 2. 北金岐遺跡 3. 太田遺跡 4. 馬場ヶ崎遺跡 5. 東谷遺跡
6. 穴川遺跡 7. 余部遺跡

を始め、北金岐遺跡^(注2)、馬場ヶ崎遺跡^(注3)、東谷遺跡^(注4)、湯井遺跡^(注5)(千代川遺跡第3次)など数多くの弥生時代の遺跡がある。

発掘調査の結果、弥生時代中期の方形周溝墓や、中期から後期にかけての溝状遺構のほか、柱穴等が多量の遺物とともに検出された。遺物は、主に溝から出土し、後期の土器が主体を占める。そのほかに石庖丁^(注6)、磨製石剣などの石器類が少量みられた。包含層中からも、弥生時代前期の土器片や布留式土器など、当地域にあっては数少ない貴重な遺物が出土している。

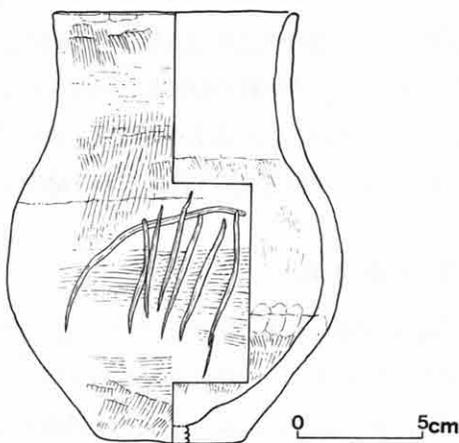
先日、改めてこれらの遺物に接する機会があり、その際、記号文を持つ土器をみつけることができた。この種の土器は、亀岡盆地では数少ない資料であるとともに、弥生時代の当地域を考える上でも参考になると思われるので、ここに紹介する次第である。

2. 遺物について

この土器は、弥生時代後期の溝SD03から出土したものである(第2図)。溝は、丘陵の傾斜に沿って、東西に穿たれていて、断面はU形を呈していた。規模は、幅が3~5m・深さは0.4~0.5mを測り、末端では浅くなって途切れている。性格については明らかでない。溝内には、後期中ごろから終わりにかけての土器が数多く埋没していた。

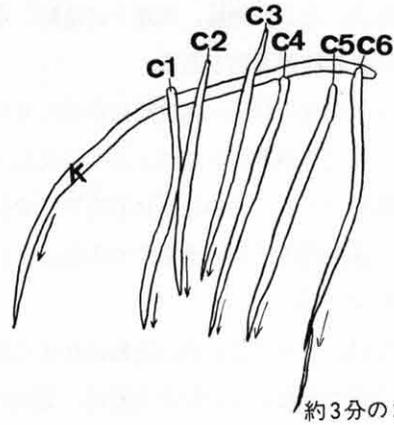
形態は、球形の体部と直立する口縁部を持つ長頸壺である。頸胴間に明瞭な区別を作らずになだらかに漸移する点や、頸部がわずかに外反して立ち上がり、端面の調整が粗雑で擬口縁状を呈している点に特徴がある。最大腹頸部は体部のほぼ中央にあるが、底径・体部に比べて頸部の立ち上がりが短いので、下ぶくれに見える。底部は平底である。

調整についてみると、外面は頸部を縦方向のハケののち、くびれ部付近を部分的に横ナデしている。体部は中央までを縦ハケ、最大腹頸部については、横ハケを施している。下半は横方向を基調としているが雑であり、ナデ痕を残している。底部付近では、器表を掻きとるようにして、斜行するハケを施している。底部では、ナデの後、ハケ状工具で調整する。ハケ原体は小口面が柔らかく弾力があり、植物繊維による調整に近い。内面は、ナデののち部分的にハケ、下半~底部にかけては、右まわりにハケ調整を施している。



第2図 遺物実測図

成形は、体部内面のユビオサエの跡が連続していること(粘土紐接合痕)、頸胴間・体部中央の欠損状況が粘土紐接合痕に沿っていること、器表外面では、部位によって調整方位が異なることなどから分割成形手法によることがわかる。タタキ成形については、器体の調整が丁寧に行われていることもあって、明らかでない。底部は、平底であり、底部輪台技法は用いられていないようである。



第3図 記号文模式図

記号文は、先端に丸みを帯びた棒状工具によって体部のほぼ中央に施されている。モチ

ーフは、下向きの弧の中に6本の縦線を施すもので、曲線と直線の単位図形の組み合わせからなっている。施文方法についてみると、線の切り合いから、まず弧を描き、次いで直線を描いたことがわかる。弧は右から左に、直線はいずれも下方へ向かって描かれている。直線は、最も左のものの始点が弧に接し、2本目、3本目と右にゆくにしたがって始点が上昇し、弧を突きぬいている。4本目では、再び下がり、5本目は4本目に比べてわずかに高く、6本目に至って再び弧に接する。これを記号を用い模式的に記したのが図3である。

このようにしてみると、直線は、施文にあたってC1~3とC4~6までの二つの単位が意識されていたようにおもえる。なお、直線の施文順は、C1→6であるかC6→1であるかは明らかでない。

藤田氏は、畿内地域に分布する350例の記号文について検討し、記号を構成する単位図形を抽出する作業に重点をおきながら分類を試みている。まず、大きく3つにわけ、抽出した単位図形の「縦線や斜線などの描きかたを基準」としてa~jの10にわけた。さらに、これらの構成のしかたによって細分を試みている。この分類案によると、当例はdとa形に属し、その下位分類の単位図形から構成されていることがわかる。

3. おわりに

以上、土器の形態と記号文の形状についての観察結果を記した。つぎに、問題点を簡条書的に記し、まとめにかえることにしたい。

① 長頸壺と記号文は、主に畿内地域南部に分布の中心があり、弥生時代後期のこの地域を特徴づけるものとして理解されている。京都府においては、山城地域において若干の出

土例が知られているが、畿内の他地域に比べると分布が希薄であり、^(注8) 府下全体をみても散発的で出土総数は限られている。今回紹介した資料は、記号文に関する良好な資料を追加することとなった。

② 南金岐遺跡のある口丹波の弥生時代の土器は、畿内地域の外縁にあって、前期以来、その強い影響下において地域色を発現してきた。それは後期においては、製作手法において顕著にみることができる。畿内では甕の製作に底部輪台技法が採用され、タタキ・分割成形手法と並んで製作上の基本原理として定着する。それに対して当地域ではタタキ・分割成形技法は取り入れられるものの、底部輪台技法はふるわず、中期以来の接合手法が主体を占めるなかで形骸的に取り入れられるにすぎなかった。このような地域のなかにおいて今回確認した資料のもつ意味は重要である。すなわち、当該資料は、長頸壺+記号文と言うきわめて畿内的な特徴を備えた在地産の遺物であるということができ、記号文は文字に先行する観念の表出形態であるとの^(注9) 評価を重視すれば、当地域の弥生土器は根底において畿内地域との密接なかわりのなかで地域色を発現していった事情をより具体的にあらわしているのである。このように当地域の弥生時代後期の地域相についての参考資料として貴重な資料ということができる。 (田代 弘=当センター調査課調査員)

- 注1 水谷寿克・村尾政人・引原茂治「国道9号バイパス 関係遺跡昭和56年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第1冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
- 注2 水谷寿克・村尾政人・田代 弘「国道9号バイパス 関係遺跡昭和57年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第7冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
- 注3 『馬場ヶ崎遺跡発掘調査報告』亀岡市教育委員会 1978
- 注4 禊田野町鹿谷東谷山頂より弥生時代後期の壺形土器が1個体、完形で出土した。亀岡市教育委員会樋口隆久氏の御教示による。
- 注5 岡崎研一「千代川遺跡第3次」(『京都府埋蔵文化財情報』第9号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983. 9
- 注6 田代 弘「南金岐遺跡出土の石庖丁」(『京都府埋蔵文化財情報』第11号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984. 3
- 注7 藤田三郎「弥生時代の記号文」(森 浩一編 同志社大学考古学シリーズ I 『考古学と古代史』明文舎) 1982
- 注8 佐原 真「弥生土器の絵画」(『考古学雑誌』第66巻1号 日本考古学会) 1980. 6
- 注9 注8と同じ。

長岡京跡調査だより

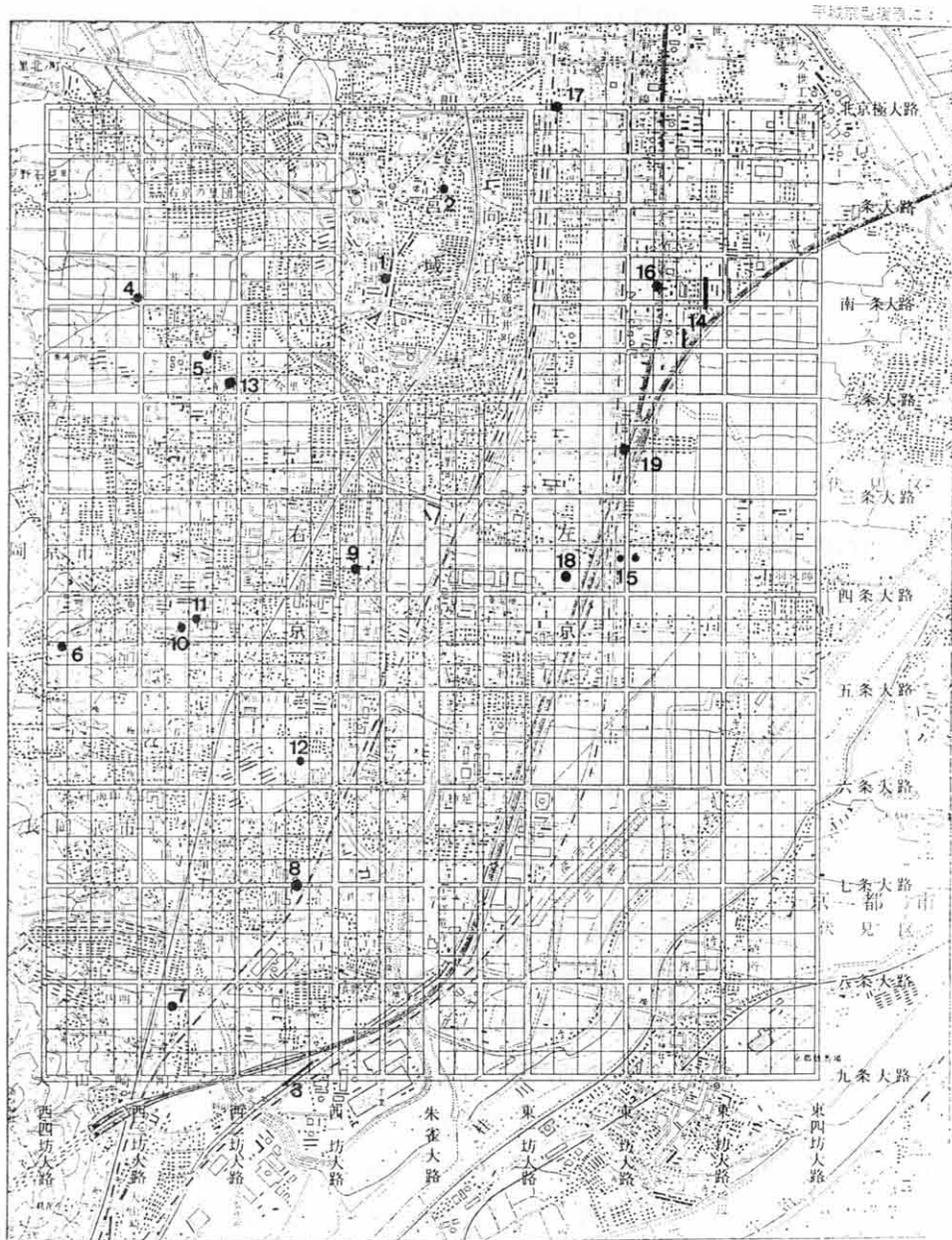
年度末を迎え、各機関もあわただしい毎日を送っています。この12月から2月の3か月間に行われた長岡京跡の発掘調査は、宮域2件・右京域11件・左京域6件の計19件あります。これらの調査では、長岡京の条坊側溝や掘立柱建物跡が数多く検出され、多大な成果を上げています。これら12月25日・1月22日・2月26日の長岡京連絡協議会で報告された計19件の調査のうち、主だったものについて簡単に紹介いたします。

宮内第169次 (1) | 向日市教育委員会
 長岡京期の掘立柱建物跡や柵列跡、溝等を検出した。これらは、2時期に分かれる。建物跡は、東西2間・南北2間の規模のもの

調査地一覧表

	次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第167次	7AN13F	向日市向日町北山12-1	向日市教委	60.11.13~12.1
2	宮内第169次	7AN7J	向日市寺戸町東野辺	〃	61.1.8~1.31
3	右京第206次	7ANSKT-2	大山崎町円明寺門田 下植野五條本	(財)京都府埋	60.9.9~9.14 11.8~11.11 12.10~12.19
4	右京第213次	7ANGKT	長岡京市井ノ内頭本3-3	長岡京市教委	60.11.22~12.24
5	右京第214次	7ANGMT	長岡京市井ノ内南内畑	(財)長岡京市埋	60.11.26~12.9
6	右京第215次	7ANPHO-2	長岡京市天神3丁目202-2	〃	60.12.17~12.27
7	右京第216次	7ANSSR-2	大山崎町円明寺里後5,6	大山崎町教委	61.1.16~3.1
8	右京第217次	7ANROZ	長岡京市調子1丁目25-1他	(財)長岡京市埋	61.1.13~
9	右京第218次	7ANIMI-2	長岡京市一文橋1丁目13-1	〃	61.1.20~2.4
10	右京第220次	7ANKKM	長岡京市天神4丁目地内	〃	61.2.12~2.28
11	右京第221次	7ANKKF-2	長岡京市長岡2丁目118-4	〃	61.2.17~2.21
12	右京第222次	7ANMSI-7	長岡京市開田4丁目417	〃	61.2.21~
13	右京第223次	7ANITT-12	長岡京市今里4丁目30-1	〃	61.2.21~
14	左京第139次	7ANVKN	京都市南区久世東土川町	(財)京都市埋	60.10.1~
15	左京第140次	7ANXWD	京都市伏見区羽束師菱川町	〃	60.11.5~
16	左京第141次	7ANEUK-2	向日市鶏冠井町馬司15-1	向日市教委	60.12.9 ~61.2.8
17	左京第142次	7ANDND	向日市森本町野田1-1	〃	60.12.16 ~61.1.18
18	左京第143次	7ANFTB-4	向日市上植野町十ヶ坪	〃	61.1.13~2.22
19	左京第144次	7ANESK	向日市鶏冠井町尻引	〃	61.1.16~2.4

長岡京条坊復原図



数字は本文（ ）内と対応

- と東西2間・南北3間の規模のもの2棟が検出されている。
- 右京第206次 (3) (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
国道171号線の歩道設置工事に伴う調査で、弥生時代の方形周溝墓や古墳時代の竪穴式住居跡を数多く検出した右京第188次調査地の近接地である。ただ、この調査では、古式土師器が出土した溝状遺構のほか、土師器・須恵器・瓦器等を検出したにすぎない。
- 右京第214次 (5) (財)長岡京市埋蔵文化財センター
南北2間・東西3間以上の長岡京期頃の掘立柱建物跡を検出したほか、古墳時代後期や縄文時代後期の土坑を検出している。また弥生土器を含むピットも検出されている。
- 右京第216次 (7) 大山崎町教育委員会
中世の溝を検出し、瓦器・青磁・白磁等が出土している。そのほか、掘立柱建物跡や土坑が検出されている。
- 右京第217次 (8) (財)長岡京市埋蔵文化財センター
右京七条二坊五町・八条二坊八町及び七条大路の推定地に当る。現在調査中であるが、南北4間・東西10間の規模を持つ、長大な長岡京期の掘立柱建物跡が検出されている。
- 左京第139次 (14) (財)京都市埋蔵文化財研究所
西羽東師川の河川改修工事に伴う調査で、南一条第2小路・南一条大路・二条第1小路等の推定地を横断する。現在、南一条第2小路側溝や、南一条大路南北両側溝、長岡京期の掘立柱建物跡、溝等が検出されている。そのうち、南一条大路北側溝は、その北側を走る宅地内の溝との間に木樋が存在する。また南側溝の南側で柵列が検出されている。
- 左京第140次 (15) (財)京都市埋蔵文化財研究所
平安時代の掘立柱建物跡・井戸・条里の坪境い、長岡京期の掘立柱建物跡・井戸・石敷き遺構、奈良時代の水田跡等を検出している。遺物としては、土師器・須恵器・軒瓦・墨書土器・墨書人面土器・木簡・漆紙文書・2彩陶器・製塩土器・土馬・斎串等が出土している。
- 左京第141次 (16) 向日市教育委員会
左京一条三坊五町及び南一条第2小路の推定地に当る。南一条

第2小路の側溝と思われる長岡京期の東西溝や、同じく長岡京期の掘立柱建物跡・柵列跡・溝等が検出されている。建物跡は3棟検出され、いずれも2間・3間の身舎に南と東ないし南と西に庇を持つ。柱筋を揃え整然と建てられている。これらの建物跡は、五町の宅地をほぼ南北に2等分する位置を走る東西溝によって区画されている。また南北に4等分する位置にも東西溝がある。遺物は、須恵器・土師器が出土したほか、柵列の柱穴から軒丸瓦等が出土している。

左京第142次 (17)

向日市教育委員会

北京極大路の推定地に当る。長岡京期の土坑等を検出した。

左京第143次 (18)

向日市教育委員会

左京四条二坊五町の推定地に当り、四条第2小路や長岡京期の掘立柱建物跡・井戸等を検出した左京第106次調査地の南接地である。この左京第106次調査では、四条第2小路側溝を埋めて建物を建設していることが明らかとなった。

今回の調査では、長岡京期の掘立柱建物跡3棟・柵列跡4条、弥生時代前期の壺棺墓1基等が検出された。掘立柱建物跡は、柱間約2.4m等間を測る南北2間・東西2間以上のもの、柱間が梁行約1.8m・桁行約2.7mを測る南北2間・東西2間以上のもの、南北に庇を持ち、柱間が梁行約2.7m・桁行約3mを測る南北4間・東西2間以上のものが検出されている。このうち南北に庇を持つ建物は、右京第106次調査で判明した左京四条二坊五町・六町の2町域を占める宅地の中心建物と推測されている。

左京第144次 (19)

向日市教育委員会

長岡京跡の左京三条二坊十四町に位置し、東二坊大路と三条条間小路の推定地にも当る。今回の調査では、三条条間小路南側溝と東二坊大路西側溝等が検出された。三条条間小路南側溝は幅約1.5~1.8m、東二坊大路西側溝は幅約1.2~1.7mを測っている。

(山口 博)

センターの動向 (60.12~61.2)

1. できごと

12. 5 山科本願寺跡(京都市山科区)関係者説明会実施
12. 6 第14回役員会理事会開催—於京都堀川会館—福山敏男理事長, 樋口隆康副理事長, 川上 貢, 藤井 学, 中沢圭二, 原口正三, 藤田价浩, 武田 浩, 東條 寿各理事, 荒木昭太郎常務理事, 安井 茂監事出席
- 12.11 篠西長尾奥窯跡(亀岡市)関係者説明会実施
- 12.14 山科本願寺跡(京都市山科区)発掘調査終了10.29~
- 12.16 京都府文化財視察団訪中帰国報告会開催(堤調査課長)
- 12.19 長岡京跡右京第206次調査(大山崎町)終了9.9~
- 12.20 千代川遺跡(亀岡市)第10次調査関係者説明会実施
- 12.25 長岡京連絡協議会開催
- 1.14 木津遺跡(相楽郡木津町)関係者説明会実施
- 1.17 住宅都市・整備公団木津地区遺跡(相楽郡木津町)関係者説明会実施
- 1.18 木津遺跡(相楽郡木津町)発掘調査終了10.7~
- 1.25 志高遺跡(舞鶴市)現地説明会開催約80名参加
- 1.29 長岡京連絡協議会開催
2. 1~2 第19回埋蔵文化財研究会(於神戸

市)出席—原口理事, 村尾, 石井, 岩松調査員

- 2.2・8・9 発掘調査主任者講習会(於京都市)受講—田中, 山下, 石井, 西岸調査員

2. 4 全国埋蔵文化財法人連絡協議会コンピュータ専門部会(於東京都)出席—山口主任調査員

- 2.21 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議(於京都市)出席—荒木事務局長, 白塚総務課長, 安達主事
西前山窯跡(亀岡市)関係者説明会実施

- 2.26 長岡京連絡協議会開催

- 2.27 畑山2号墳(綴喜郡田辺町)関係者説明会実施
西前山窯跡(亀岡市)発掘調査終了
11.26~

2. 普及啓発事業

- 12.14 第32回研修会—於京都社会福祉会館—開催(主題, 発表者及び題名)『南山城地方の最近の発掘調査成果から』辻本和美, 小池 寛「芝山遺跡の発掘調査について」中島 正「史跡高麗寺跡第2次調査」松本秀人「木津町大鳥遺跡について」奥村清一郎「平野山瓦窯跡発掘調査」
- 12.14~15 中世土器研究会第4回研究集会において, 水谷主任調査員, 石井調

- 査員「篠窯跡群」報告発表
1. 9 第8回調査成果交流会(於向日市文化資料館)を世話役として開催, 引原調査員「西長尾奥第2窯跡群1号窯」, 肥後調査員「舞鶴市志高遺跡の奈良・平安時代の遺構」を報告発表
 2. 23 第33回研修会(於長岡京市産業文化会館)開催(主題, 発表及び題目)『難波・平城と長岡京』山中 章「1985年度長岡宮跡の発掘調査～北辺官衙の建物配置を中心に～」山口 博「昭和60年度の長岡京跡右京城の調査成果」山本輝雄「昭和60年度長岡京跡左京城の発掘調査」植木 久「難波宮跡の発掘調査」金子裕之「平城京と長岡京—日本の古代都城に於ける祭場—」参加者約100名
 2. 23 第4回講演会(於長岡京市産業文化会館)開催(講師及び演題)中尾芳治「中国の都城と日本の都城」参加者約100名

受贈図書一覧 (60.12~61.2)

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	柿ノ木平Ⅲ遺跡発掘調査報告書, 海上Ⅰ・海上Ⅱ・大久保Ⅰ遺跡発掘調査報告書, 新平遺跡発掘調査報告書, 荒木田Ⅱ遺跡発掘調査報告書, 高玉遺跡発掘調査報告書
(財)いわき市教育文化事業団	砂屋戸荒川館調査概要, 龍門寺遺跡
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚古墳(1), 三ツ木遺跡
(財)印旛郡市文化財センター	(財)印旛郡市文化財センター年報1, 北大堀・猿楽場遺跡発掘調査報告書
神奈川県立埋蔵文化財センター	千葉地東遺跡
山梨県埋蔵文化財センター	研究紀要2, 笠木地藏遺跡
(財)滋賀県文化財保護協会	日吉・吉住池遺跡発掘調査報告書, 延勝寺湖底遺跡発掘調査報告書, 吉身中遺跡発掘調査報告書, 志那・北山田湖底遺跡調査報告書, ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅻ-3, 同Ⅻ-9, 滋賀県文化財目録昭和60年版
(財)大阪府埋蔵文化財協会	西大路遺跡・今木廃寺遺跡
奈良県立橿原考古学研究所	橿原考古学研究所年報11
(財)元興寺文化財研究所	西国三十三所巡礼寺院の版木
苫小牧市教育委員会	苫小牧東部工業地帯埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅶ
仙台市教育委員会	仙台城三ノ丸跡
群馬県教育委員会	太田東部遺跡群, 荒砥前原遺跡・赤石城址
長野市教育委員会	平林若者連永代記録
掛川市教育委員会	女高遺跡発掘調査概報, 梅橋北遺跡発掘調査報告書, 殿谷城址他遺跡発掘調査報告書, 掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ
八日市市教育委員会	昭和58年度 埋蔵文化財発掘調査報告書
野洲町教育委員会	銅鐸の謎を解く
寝屋川市教育委員会	高宮廃寺発掘調査概要報告Ⅵ, 寝屋川市文化財図録Ⅰ, 寝屋川を歩く
松原市教育委員会	松原市遺跡発掘調査概要
神戸市教育委員会	昭和57年度 神戸市埋蔵文化財年報, 昭和58年度 遺跡現地説明会資料, 昭和59年度 遺跡現地説明会資料, 史跡 処女塚古墳, 神楽遺跡発掘調査報告書, 地下に眠る神戸の歴史展Ⅱ
川西市教育委員会	川西市満願寺発掘調査報告書
多可郡教育委員会	兵庫県多可郡中町妙見山麓周辺における埋蔵文化財詳細分布調査,

和歌山市教育委員会

下関市教育委員会

宗像市教育委員会

釧路市立博物館

八戸市博物館

北上市立博物館

(社)日本金属学会附属金属博物館

栃木県立博物館

君津市久留里城址資料館

中野区立中野文化センター郷土資料室

根岸競馬記念公苑 馬の博物館

浜松市博物館

愛知県陶磁資料館

(財)辰馬考古資料館

瀬戸内海歴史民俗資料館

北九州市立考古博物館

東北大学埋蔵文化財調査班

東北学院大学東北文化研究所

東京大学文学部考古学研究室

國學院大學考古學資料館

立正大学文学部考古学研究室

大手前女子大学

熊本大学文学部考古学研究室

大宮市遺跡調査会

文化庁

宮内庁書陵部陵墓課

玉川文化財研究所

鎌倉考古学研究所

(財)黒川古文化研究所

第7回特別展 北播磨埋蔵文化財展展示資料出土遺跡の解説

増補 大谷古墳

若宮古墳遺構確認調査概報Ⅱ

宗像埋蔵文化財発掘調査報告書

植物標本目録(1), 魚類標本目録(1), 地学標本目録(1),

釧路市立博物館紀要 第10輯

縄文時代の馬淵川

北上・和賀地方の絵馬展

金属博物館紀要 第10号

研究紀要 第2号

久留里城址資料館年報6

中野区平和の森公園北遺跡

馬のシルクロード展

椿野遺跡

愛知県陶磁資料館研究紀要4

秋季展—銅鐸—

瀬戸内海歴史民俗資料館年報 第10号, 香川県古代窯業遺跡分布調査報告Ⅱ

経塚遺宝展

東北大学埋蔵文化財調査年報1

東北学院大学東北文化研究所紀要 第17号

東京大学文学部考古学研究室研究紀要 第4号

國學院大學考古學資料館紀要 1984

武蔵・大井鹿島遺跡

大手前女子大学論集 第19号

サモト遺跡(2)

大むかしのくらし

全国遺跡地図 岡山県

武器・武具・馬具

坂本遺跡発掘調査報告書, 大ヶ谷戸遺跡発掘調査報告書

神奈川県鎌倉市小町二丁目345番2地点遺跡, 浄土宗大本山 天照山 蓮華院 光明寺

黒川古文化研究所収蔵目録 第1～第9

木簡学会	木簡研究 第7号
朝鮮学会	朝鮮学報 第117輯
(財)古代學協會	古代文化 Vol. 37 No. 12, 同 Vol. 38 No. 1~No. 3, 平安京左京八條三坊二町 第2次調査
博物館等建設推進九州会議	Museum Kyushu 第18号
辻哲也君追悼文集刊行会	辻哲也君追悼文集
全国埋蔵文化財法人連絡協議会	全国埋蔵文化財法人連絡協議会の便覧
集英社	王権の争奪
新人物往来社	図説 発掘が語る日本史4 近畿編
雄山閣	弥生文化の研究7
京都府立丹後郷土資料館	丹後の紡織 I
長岡京跡発掘調査研究所	長岡京
京都市文化観光局	京都市の文化財
向日市教育委員会	向日市埋蔵文化財調査報告書 第10集
八幡市	八幡市誌 第1巻
宮津市教育委員会	図録 宮津城跡
(財)泉屋博古館	泉屋博古館紀要 第二巻
宇治市歴史資料館	宇治市歴史資料館, 宇治市歴史資料館年報 昭和59年度
城南郷土史研究会	やましる 17
芦田実雄	わが郷土史
井上定清	大阪府下埋蔵文化財担当者研究会(第13回)資料, 昭和60年度(後期) 埋蔵文化財専門職員研修会資料
小嶋芳孝	鮎倉島・七ツ島(大島)
村岡正	滋賀県の庭園 第3集
渡辺重義	「つちはやし」

—編集後記—

3月になってようやく暖かくなってきましたが、情報19号が完成しましたのでお届けします。

本号で昭和60年度最後の情報となりましたが、投稿原稿もあり、内容自体は充実したものになっています。本年度、特に成果のあった舞鶴市志高遺跡については、本文中でも述べられているように、府下有数の複合遺跡であることがわかりました。また、亀岡市千代川遺跡第10次調査でも弥生時代の竪穴式住居跡を検出するなど多くの成果があげられました。よろしく御味読下さい。

(編集担当 = 土橋 誠)

京都府埋蔵文化財情報 第19号

昭和61年3月31日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
☎ (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
☎ (075)441-3155 (代)